

妹の部屋から醫者が出て來た。悪事をして來たやうな顔をして。彼は醫者の表情に注意するのが不快であつた。醫者は煙さうな鼻をしてゐた。鼻の穴が擴がると此の醫者は嘘をついてゐるのに定つてゐた。

「妹はどうです？」

「お變りはないやうです」

「嘘だ——醫者は粗略に彼の手の脈を見た——見ても駄目だ。もう此の患者は優生學に殺された。」

「血痰は？」

「今日はありません」

醫者の眼鏡の金に果樹園の雪が映つた。プリズムから流れたスペクトルは弱まりながら壁の斑点の上へ折れてゐた。

「熱はひけてをりますね」

「どちらが早いでせう」

「何がです？」

「いや」

彼は顔を赧らめた。が、逆に此の健康者の心へ戯弄つてみたくなつた。

「死ぬのがです」

醫者は彼を見たまま口を歪めて黙つてゐた。

「妹の方が早いでせう？」

醫者は生まましく笑ひ出した。だか、兄と妹の肺臓が壁を經立てて腐つて行く。これは事實だ。二人はその病ひを死んだ兄から傳染された。

醫者は鼻の穴を擴げながら壁の獵銃を睨んで歸つて行つた。僧侶を呼べと云ふやうに急ぎながら。外では雪の上で黒い鳥が亂れてゐた。海岸の石の上で燈臺が光り出した。

彼は直ぐ自分の仕事をし續けた。彼の仕事は自分の死後の靈魂が木星の大赤點へ到着する時間の測定であつた。彼は靈魂が一秒二十五萬 光年の速度を持つてゐることを信仰した。彼の此の信仰した恒数は空氣と死者の靈魂との摩擦から發する輝きの光度から計算された。だが、その自分の靈魂の發出する時日は目前に迫つてゐる。

彼は自分の靈魂が一直線に馳けるものとは思はなかつた。電と空氣の濃氣差があつた。星雲と月と太陽の引力に屈折した。なほ三十箇の木星族の彗星が邪魔をした。今、彼の此の必至の遊戯を苦しめてゐるものは、木星を巡る九つの衛星に反應する靈魂の屈折率である。

「兄さん」

隣室から妹の弱々しい聲がした。彼は黙つてボイルの法則にかちりついた。

$$P \cdot \frac{1}{1+mt} = \frac{P_0}{1+moto} \dots\dots\dots$$

「兄さん」

$$\frac{1+Rp}{1+Kpo} = \frac{1}{r} = 1 \dots\dots\dots$$

「カーテンを開けてよ」

「待て」

$$\dots\dots\dots \frac{2}{1} 1 - S - \frac{2}{r^2} dv = -dS \left(\frac{2}{r} \right) \dots\dots\dots \int dr = a r B \dots\dots\dots$$

「もうお日様が這入るでせう」

彼は顔を上げた。太陽はぼやけながら灣の中へ浸り出した。ふと彼は一度地の上を歩いてみたくなつた。もう長らく彼は天界のことを考へた。今一度、窓口の葉を落した枯枝をへし折つて出て来る水々しい粘液を指さきに感じてみたい。だが、彼はベッドから降りると獵銃を取り上げた。銃身は掌の中でひやりとした。幻の中を逆縁に一羽の鳥が落ちて来た。テリアがひらりと巖頭を飛び越えた。

彼は銃口を太陽に向けて狙つてみた。太陽は銃口の先で輝きながら、きりきりと廻轉した。一個の思意が光線と等速度をもつて太陽に逆行した。一瞬、二十萬年の倒逆の歴史が銃口の先端へ集合した。

一撃でツ

銃口がはたりと落ちた。彼は敷布を攫んで咳き出した。一本の緑線が太陽から閃いた。彼は苦しさに銃をついで果樹園の方を見た。林檎は間もなくあの枝を撫めるにちがひない。間もなく町子は地の上で處女を落すにちがひない。そして、彼は戀愛と童貞とを苦々しく輕蔑し

た。隣室からまた妹の聲が弱々しく聞えて来た。

「婆や」

「婆や」

二

沼の暗い坂道の上から鈴が鳴つた。町子の櫓だ。彼は暖爐の傍から立ち上つた。馬櫓の青い提灯が雪の中を揺れて来た。彼は頁を伏せて外へ出た。雪は彼の眉毛に降りかかつた。果樹園の路へ降りるとテリアが波のやうに馳けて来た。彼は憂鬱に立ち停つて沼から下る青い提灯を眺めてゐた。

櫓は動き停つた。幌の中から町子の降りる姿が見えた。灣は彼女の後ろで黒々と静まつてゐた。彼は町子から眼を外らした。彼は町子と逢はねばならぬことを後悔した。

テリアは彼の腰に飛びつきながら頭の雪を擦りつけた。

町子は彼の前まで来ると立ち停つたが黙つてゐた。遠く埠頭で警邏船が横様に凍つてゐた。

「風がなくていいわ」

町子は垂れ下つた毛皮の首巻を肩へ投げた。空虚の櫓が港の方へ動き出した。

「どうしてこんな所に立つてらつしやるの」

「あなたは、どこかへ行くんですか」

「私、来てはいけなかつたの」

彼は黙つて戸口の方へ歩いた、足の裏で雪が鳴つた。いま町子に逢へば、また彼女と逢ひたくなるのは分つてゐた。町子は戸口の切石の上で雪を拂つてゐた。

「どうしてあんな所に立つてゐらつしつたの？」

「あなたが来ると困ると思つたんです」

「そんなに私が恐いの？」

「まアお遣りなさい」

「私、歸つたつていいのよ」

彼は家の中へ這入ると暖爐へ炭を投げ込んだ。町子は椅子に腰を降ろすと圓く蹲んだ彼の脊中に手を乗せた。

「ね、私、手紙を昨日も書いたの。だけど、もう出すのがいやになつたの」

「僕も昨日手紙を書いたんです」

「まア、どんなお手紙、ね、教へてよ。下さらなかつたんでせう」

彼の眼の横で町子の膝が喜ばしさうに動いてゐた。此の膝よ！悲しみとは何か。壓力の不足である。

「あなたのお手紙、いいお手紙だつたんでせう。私、いやなお手紙嫌ひよ。幸福な手紙がいいの。私、ちゃんとあなたの手紙を藏つてあるの」

「もう炭はこれ位でいいでせう？」

「ええ澤山、私、雪で顔がほてつて仕様がないわ」

窓を眼がけて飛びつくテリアの爪音が外でした。雪が窓の敷居で凍つてゐた。彼は暖爐の傍へ椅子を引きよせた。

「あなた、悲しさうなお顔ね」と町子は云つた。

彼は黙つて町子の顔を見た。電燈の光りを横に彼女の顔は眉をひそめてゐた。

「どうなすつたの」

「ロウ・スピリットです」

「あまり考へるからよ。もつと、私、毎日来てあげたつていいんだけど」

「あなたは成るだけ自由に愉快にしてらつしやい」

「まア」

「いや、皮肉ぢやありません。僕はとても愉快になれないんだから、愉快ぢやなくてはいけません、一體、不愉快な顔が何の功德になるんです？」

「あなた、一寸、あの音は何んでせう」

町子は恐わさうに首を立てた。

「テリアですよ」

「さうかしら、私、此の頃何にもびくびくするのよ。どうしてかうなんでせうね？」

「あまり愉快すぎるんでせう」

「まア」

「さう云ふものですよ。女の人が愉快な時は、一寸變つたことがあつても非常に恐く思ふんです」

「あなたはちつとも私の心持ちを御存知ないんだわ 私、愉快なことつてちつともなくつてよ」

「そりやいけない」

「だつて、さうぢやありませんか」

「あなたはいくらだつて愉快になれる」

「あなた、そんなに起きてゐらしいの？」

悪い、と彼は思つた。だが、今寢ては、なほ悪い。――

「あなたは僕の所へそんなに來てゐたつていいんですか」

彼女は暖爐の火へ眼を落した。彼女の母が彼女を食ひとめてゐるのは分つてゐた。彼は胸を突かれた町子の胸の騒ぎを感じたいとは思はなかつた。だが、何もかも今暫くだ。

「あなたは誰かに結婚を迫られてゐるんぢやありませんか」

「どうしてそんなことを仰言るの？」

「いや、たださう思つただけなんです」

「どうして分つて？」

「あなたの思つてゐることなら、大抵僕には分ります」

「でも私、謝絶つたのよ」

だが、いづれ謝絶出來ないときが、來るだらう、次には、處女を落す祝賀である。次に子供だ、彼は壁にかかつた黒々とした天體の圖に眼を向けた。

「私、今夜はもつと面白いお話を聞きたかつたの」

「あなたにはどんな話が面白いんです？」

「私、あなたがきつと私をいややうにして下さると思つてみましたの」
「どうして？」

「あなたは御存知ぢやありませんか」

「あなたは僕が毎日何を考へてゐるのか知つてゐるんですか」

「ええ。知つてますわ」

「僕はね町子さん。云つてみれば、あなたが毎日何を考へてゐらつしやるのかとそればかり考へてゐたんです」

「私もさうよ」

「だけど僕は、あなたのことを考へるのがもういやなんです。殊に此の頃はなはいやです」

「ぢや來なければ良かったのね」

町子は顎をふくらませた。愛の反語を間違へたのだ。だが、彼はもう饒舌りたくはなかつた。だが、今饒舌らなければ、一つの誤解を残して死ぬにちがひない。だが、愛しながら愛してはならぬとなると、いづれ一つの誤解は残るだらう。しかし、愛とは何か。時には反語を説明する努力である。――

「何ぜあなたに逢ふのがいやかと云ふと、町子さん、さう怒つてはいけません。僕はこんな説

明をするのももういやなんです。僕の病氣は人を愛してはいけないんです」

「もう分つてゐますわ」

「僕は話が自分の病氣に觸れて來ると。いつも後がたまらないんです。もう何千回同じことを考へたか。いくら考へたつていつも考へる範圍は定つてゐるんです。第一あなたのこと。第二にまたあなたのこと。そして最後があなたのこと。僕はもうこれが苦痛だ。どうにもなりはしない」

急に町子は彼の胸へ崩れて來た。あまり不意だ。彼は冷淡に彼女の首を見詰めてゐた。

「さア、立ち給へ」

「いや、いや」

町子の熱を含んだ身體が彼の胸の上で、圓々と滾痒き出した。彼は彼女を元の姿勢に返さうとした。椅子が鳴つた。町子の身體はまた彼の胸へ跳ね返つて來た。

「君、傳染る！」

「いや、いや」

「まア待ち給へ」

突然彼は片手で町子の絹の脊中を抱いたまま悲しくなつた。何ぜ、死に行く胸へ處女の身體

を投げつけるのか！ 悲劇ではない。嗤つてくれ。腕が慄へる。唇が唇へ。死が乗り移るのだ！——彼は立ち上つた。櫛が落ちた。町子の口へ觸れやうとした彼の唇は結ばれたまま慄へてゐた。町子は涙で亂れた數本の頭髮を頬につけてうな垂れた。

嵐はやんだ。と彼は思った。また一つの處女と童貞とは依然と平行線の上を馳けて行く。恐らく二線は交はることはないだらう。彼はその交はる無限の極の幅射點を考へた。もしも愛がそのときに生れるものであるならば、今は潔く死ぬが良い。肉體とは愛への二つの平行線の距離である。靈魂とは愛への幅射點への速度だ。——彼は平靜に返つて來た。彼は閉つた窓の鏡戸を開けた。凍つた雪の塊りが戸の上から落ちて來た。冷たい空氣が部屋の中へ流れ込んだ。黒い人影が果樹園の雪の中を歩いてゐた。彼は沼の上の空を見た。夜は盛り上つた雪線の上で茫々としてゐた。彼は夜の高さを考へたそして自分の高さを考へて死を待つた。

「町子さん、あなたは僕にお伽話をきかしてくれなければいけません。僕は今はもう非常にあれが好きなんです」

「私、寒くなりましたから御免なさいな」

「町子は首巻を肩へかけた。

「今夜はいつもより静かですね。櫛がちつとも通りませんよ」

町子は黙つて寒さに身を慄はせた。彼は窓の明るみの太さに出て行く湯氣の擴がりを眺めてゐた。町子は櫛を拾つて頭へ差した。

「あのう、私、もうこれから來ない方がいいんでせうか？」

彼は黙つてゐた。

「私、分らなくなりましたの」

「僕にさう云ふことをきくのはいけませんね」

「でも……」

「お母さんの仰言つたやうになされば、それが一番いいと僕は思つてゐます」

町子は暫く唇をひき締めて黙つてゐた。と、急に彼女は手に首巻を巻きつけて立ち上つた。

「あなたは怒つてらつしやるんですか」と彼は云つた。

町子はドアの傍まで行くと彼の方を見た。眼が涙で光つてゐた。

「さやうなら」

「町子さん、悪い意味にとつてはいけません。僕は決して悪いつもりで云つたのぢやありません」

彼は町子の方へ近か寄つた。町子はドアの外へ出て行つた。彼は彼女の後を追はうとした。が、やめた。——生ける者を追つてはならぬ——彼はハンドルに片手をかけて町子の後姿を見送つてゐた。

彼女は雪の中をうな垂れながら、黒く橋道の方へ曲つて行つた。

——俺は愛してゐるんだ！

——俺は逢つてはならんのだ！

——俺の肺は腐つて行く！

彼は入口の隙きから雪の上に倒れてゐる光線へ眼を落した。——誤解が一つ生と死の間へ落された。——だが、愛しないと云ふことが、常に最も愛すると云ふことに變るのだ、それが愛の最高の理論である。——

彼は戸を閉めると力なく煖爐の前へ戻つて來た。

すると、ふと彼は亡兄の彫りつけていつたいつもの慘酷な壁の羅旬語が眼についた。

Quis veni in horto nostras?

我らが園に入り來る者は誰ぞ、（と彼は讀んだ）今、その毒園に押し籠められてゐる者は二人である。二人は兄から病を傳染された。それに！彼は兄のその嘲笑的な壁の文字にまた新

らしく胸を突き刺された。彼は忘れてゐた憎惡を再び兄の靈魂へ向つて投げかけた。

「汝の選んだ者は、汝の弟と妹だ！」

彼は兄に飛びかかるやうにナイフを持つて、壁へ自分の怨恨を彫りつけやうとした。だが、彼は自分達に傳染されて直ぐ次ぎに閉ぢ込められる者の心を考へた。——今に來る。今に此の壁と向つて日日同じことを考へる者があるにちがひない。そして、彼らは、臆て自分達のために殺されて行くにちがひない。——

彼はまた冷靜に落ちつき出した。彼はそれらの靜に後から來る選ばれた不幸な者達のために、ソクラテスの穩かな言葉を書き出した。自分の心をなだめるやうに。生前の智識を壁の上で兄と二人で競ひながら。

Si mortem timeamus, semper aliquid terror nobis impendit.

彼は壁の兄と自分の言葉とを詳細に比較した。すると、兄の動詞の使用法が間違つてゐるのを發見した。

「兄よ、お前の古典は永久に意味が通じないで濟むだらう。俺はお前の嘲笑を黙殺する」

雪は朝日に輝いてゐた。沼の彼方で銃が鳴った。馬は朝日を割つて雪の上を馳けて来た。彼は微風を避けて家の前へ出た。彼は考へることが何もなく、心はほのぼのとしてゐた。海の上では白帆が風を孕んでゐた。鷗は低く海流に戯れてゐた。漁場は眼下で賑はひ出した。一服の煙草が果樹園の方から匂つて来た。

「お早やうございます」

「お早やうございます」

健康な若者が朝の料理を運んで行つた。水々しい籠の若菜が窪んだ雪線の下へ鮮かに隠れていつた。

彼は壁の傍から道へ出た。一人の老人が道の真中に立ち停つて不思議さうに彼の家の方を見つめてゐた。ふと、彼は妹が家の中で黙つて死んでゐるやうな氣持ちがした。朝起きてからまだ彼は妹の容子を見なかつた。窓が閉つてゐる。彼は直ぐ家の方へ引き返した、郵便物が投げ込まれた。妹は隣室の壁の中で眠つてゐた。

「よし」

彼は足音を忍ばせて窓を開けた。抜け毛が明るくなつた部屋の隅で浮き上つた。婆やが跛足をひきながら沼の方へ血痰を捨てて行くのが見えた。林檎の枯葉が寒く彼女の脊中の上で茂つ

てゐた。彼は瘦せた妹の部屋へ華やかなプリズムを持つて来た。(それから花を取り寄せやう)少女の蒼ざめた寝顔の上で七色のスペクトルが花を開いた。赤、橙、黄、緑、鼻は鋭い青藍色の雄蕊となつて高まつた。

妹は眼を醒した。醒めた此の造花は黙つて部屋の中を見廻した。

「兄さん、私、夕べ死ななかつて」

彼は黙つて妹の顔を見た。——もう遠くはない！——

「誰だかコツコツ、コツコツ窓を叩くのよ」

「本當かね？」

「ええ、そしたらお爺さんがゐて、私に、お前死んだつて云ふのよ。私、死にやしないつて云ふのに、死んだんだ死んだんだつて云ふの」

「夢を見たんだよ」

「どうかしら」

「夢なんだよ、何んでもないよ」

彼は自分の部屋へ戻つて来た。

「あれは危い。もう駄目だ！」

しかし、彼はもう何事も考へたくはなかつた。

「何んでもないんだ。何んでもないんだ」

一つの彼の小さな頭腦の組織の中を、十三萬の宇宙の大群が悠々と静かな魚城のやうに廻轉した。その大宇宙の極みは何處にあるのか？ そのまた大宇宙の極みは何處にあるのか？ 彼は涙かにじんで來た。

「神よ、御名を明し給へ！」

テリヤはひとり斷崖の上で眺ねてゐた。燈臺のガラスの光りが彼の眼を貫いた。彼は郵便物を持つて沼の方へ行かうとした。すると、老人はまだ彼の家の方を鳥のやうに眺めて立つてゐた。彼が近づくると老人は不意に笑ひ出した。

「あれは刑務所でございますか」

狂人だ、嶄新な生活が始つてゐる。遠く子供の歡聲が窪地の雪の中から上つて來た。赤い船が半島の横へ現れた。

彼は郵便物の一つを切つた。都會の變名したKからだ。Kは彼の親しいソーシヤリストである。

— Hは投獄された。

— Tはロシヤへ逃亡した。

— Sは行衛不明。

— Mは死亡。

— Uは殺された。

彼は手紙を懷へ押し込んだ。周章てるな。俺の料理されるのも、もう直ぐだ！ 何んでもない、何んでもない。

沼は雪の中で静まつてゐた。枯れ折れた蘆の間から數本の芽が鋭く空を狙つてゐた。一羽の鳥が静に雪の上へ降りた。婆やが壺を抱いて水際から登つて來た。

「お早やうございます。もう御飯の用意は出來てをりますでございます」

「ああ」

彼は湯氣の立つた爽々しい朝の食卓の前で、健康さうに今は静かに箸を取つてみたくなつた。

婆やはまた痰壺を抱きながら跛足をひいて雪の坂路を下つていつた。

月蝕げつしやくの夜よが廻まわつて來きた。婦女ふぢよの月經げつけいが亂みだれて來きた。濱はまに打うち寄よせる波足なみあしが狂くるひ出だした。その夜よ、彼かれの妹いもうとの靈魂れいこんが速力そくりきを出だし始はじめた。

「兄にいさん、兄にいさん」

「ここにあるぞ！」

「兄にいさん」

「よしッ、ここだ」

「兄にいさん……」

「兄にいさん……」

「兄にいさん」

……

……

草
の
中

村から少し離れた寺の一室を借りた。そこでその夏を送ることにした。寺の芝生の庭には鐘樓と塔があつた。門には鐵の鉞を打つた大きな扉が夜でも重く黙つて閉いてゐた。塔の九輪の上には鳩がとまつてゐた。

静かな山寺である。寺には和尚が死んでゐなかつた。誰もゐないその寺の中を時々私は歩いてみた。佛壇もなければ内陣もなかつた。ただ平安朝時代の貴族の廣い館のやうで、裏には古い塚の傍にこれはまた清らかな水を満々と湛へた泉があつた。雜草は丈延びて枯葉の中から生えてゐた。

私はこの寺を借りるとき番人から、

「あなたのお好きなやうに」と云ふ答を得た。番人は私に寺を任せて旅へ出て行つた。私は一日に一度鐘樓に登つて釣り鐘を撞けばそれでよかつた。三つの捨て鐘を打つて、十撞

の繩を引くのである。その他の時は私は陽が輝けば芝生の上に出て、高い銀杏の樹の影に眠つた。微風は湖の方から吹いて來た。

夕暮になると門の厚い扉の前へ村の娘らが塊まつて遊びに來た。彼女らは門から中へは這入らなかつた。芭蕉の葉のゆるやかに揺れる下で彼女らは華やかに笑つてゐた。空は湖の明るさを受けて薄桃色に輝いてゐた。芝生は讓の中でいよいよ緑の色を増し始めた。行水に洗はれた娘達はそこで母親の呼び聲のするまで笑ひ合ふのである。彼女らは京の娘の美しくなやかな風を持つてゐた。浴衣に赤い帯を締め、長い袂を微風に靡かせて若者達の話をした。私が傍を通ると彼女達は急に話をやめて黙つて了つた。

或る日、Kが海を越えて遠くからぶらりと來た。彼は戀人を亡くしてその淋しさを紛らすためにやつて來たのだと直ぐ分つた。

「鈴子さんはいい人だつたね」と私は云つた。

彼は黙つてゐた。鈴子とは彼の戀人の名前である。

「静かで、愛情が深かつた」

私は堂を廻つてゐる高縁に蹲んで壁の上を眺めてゐた。足の裏に板の木目を氣持ちよく感じながら夜の來るのを待つた。山嶺が柱を傳つて登つて來た。

「ここはいい所だね」とKは云つた。

「僕は氣に入つてゐるんだ。それにこの家は僕の自由になるんだ」

「いいね」

彼は跣足のまま飛石の上へ降りて庭の奥へ奥へと歩いていつた。私も彼の後からついていつた。樹の深深と垂れ下つた繁みを幾つも潜り續けて池の傍へ出た。藤が雑草の中から這ひ出て池の上へ垂れ込んでゐた。鯉は水草の下に深く沈んでゐた。

「ここはあまり淋し過ぎる」とKは云つた。

「雉子が澤山あるんだよ」

「やうだらう」

彼は暗く繁つた周囲の樹々を眺めてゐた。苔をつけた石塔が一つ傾いて草の中に立つてゐた。笹の中を潜る猫の音がした。私は高い松の樹を仰いだ。

「松と云ふものはどこか淋しいものだね。なぜだらう」

「風が渡ると松はとても淋しいよ」

「ひとり長生きをすると云ふ感じを強く受けるからぢやないか」

「樹を見てゐるといつもさうだが……」

「しかし、樹になりたいね」

二人はそこから奥へは行かずに戻つて来た。私は煙草を吸つて火を彼の方へ差し出した。彼は鐘樓へ登りたがった。私は冷たい石段に腰を降ろして蝙蝠の飛ぶのを眺めてゐた。塔は夜の空に静かにだんだん浮き始めた。

「君、此の村に、君を愛してゐる女の子があるのかね？」と彼は鐘樓の上から訊いた。

「ゐないよ」

「ゐてもいいぢやないか」

「そりやもう」

「かう云ふ寺へ、人眼を忍んで静かに誰か来ると云ふのはいいね」

「いい」

「草を分けて」

「君が来てくれたぢやないか」

「いいのかね？」

芝生は柔かに濕つて来た。空は澄み渡つてゐた。その日晝間暑かつたそれだけに星はきらきらと牙えて光つてゐた。萩の叢がった中では蟲がひそかに鳴いてゐた。夜が更けてから二人は

門を脱けて裏の土手の上へ出た。彼はその深い草の中へ坐り込んだ。

「戀人を失ふと馬鹿になると云ふね」とKは云つた。

私は彼に彼の亡くなつた愛人を追憶せしめる言葉を云つてよいかどうか分らなかつた。空気が

はだんだんに冷えて来た。村の火が草の中から揺れて見えた。夜鳥が二羽鳴きながら塔の方へ

飛んでいつた。

「君のお父さんは死んだのだね？」と彼は云つた。

「死んだ」

「夢を見ないか？」

「見ない」

「夢を見てゐるといいよ」

「さうかね」

「鈴子はその僕を愛するね。實に驚くほどだ」

「夢の中でか？」

「うむ」

「さう云ふことがいつまでも續けば一番いいね」

ると草は冷めたかつた。さうして露は葉の上に降り始めた。

「いけない」と急にKは叫ぶやうに云つた。

「どうした？」

「かう云ふ草の中で鈴子を抱いてやつたことがあるんだ」

私は黙つてゐた。

「それに丁度こんな夜だ」

彼は頭をかかへてそのときの草の匂ひを嗅ぎつけるやうに雑草の中へ倒れ込んだ。

「うむ」

塔の向うに私の知人の家が見えた。窓がまだ一點明るく開いてゐて、そこから吊られた蚊帳がよく見えた。その中にはその家の子が長らく病んで寝てゐる筈であつた。醫者の俵が絶えず降ろされてゐたのを思ひ出した。風が柔かく平原の上を渡つて來た。草は葉を擦つて胸の前でさらさらと音を立てた。着物が夜氣に濕つて重く肩から垂れ下つてゐた。二人はいつまでも立たうとはしなかつた。あまり彼も話さなかつた。私は病人のあるその家の明るい一點の窓を眺めてゐた。暫くしたとき、急にその窓の蚊帳の中で母親が起き上ると傍の誰かを覗き込んだ。

「君、あそこに明るい窓が見えるだらう」

「うむ」

「今誰か起き上つて何んか覗いてゐるだらう」

「うむ」

「あそこに僕の知り合ひの子が重病で寝てゐるんだよ。死ぬんぢやないかね」

二人は長らく黙つて草の中からその病人の部屋を覗いてゐた。草の緑の匂ひが微風に揺られて、さまざま來た。時々星が斬りつけるやうに流れた。遠くの道を歸る馬子の唄が聞えて來た。村はだんだんと眠つていつた。梨畑の番小屋の中で火が赤く燃え始めた。足を延ばし變へ

芋

羽根枕のやうに盛上つた蜜柑畑に包まれて、入海が澄んでゐた。その蜜柑畑の丘と丘との間の豊烈な匂ひの中に、朽ちかけた避病院が沈んでゐた。晩秋になると、病院からは患者が一人ふたりと退院した。さうして、漸く小使の爺は看護婦と一人の患者との三人で、蜜柑畑の病舎の中に暮らしてゐた。

長々と續いた廊下の中ごろの壁には、鈴なりになつた蜜柑の枝が萎びた葉をつけて刺さつてゐた。患者が少くなつたといふことは、爺にとつては幸せだつた。

朝になると、毎朝のやうに爺は蒲團の中に腹這ひになり、煙草を吸つた、すると、啖が咽喉にからまつて咳始めた。その咳と調子を打つかのやうに、入海からは、驛の發動機の音が「トントントン」と響いて來た。看護婦は凍つた昇永水の容器に手を入れながら、廊下の端で咳いた。

「鱒が澤山取れたのね」

「天気はどうぢや」と爺は蒲團の中から聞き返した。

「星が降るやうに、おゝ、寒む、寒む」

からからと下駄を引き摺つて看護婦はまた自分の床へ歸つていった。

「トントントントン」

爺は小繩を腰に挟んで薄暗い外に出た、蜜柑畑まで登つて來ると、温泉町へ出る一番の乗合ひが、海から押上げて來る霧の中から現れた。

「五時だなア」

丘を濡らしながら谷から流れて來る霧を見ると、爺はまた引き返した。彼は家からネルの首巻きを出して來て、頬冠りになると、鼻歌を唄ひながら丘を下つていった。火舟槽の下まで來ると、魚と海の匂ひが明け出した空の下から流れて來た、

爺は貰つた鱒の束をぶら下げたまゝ、好きな後家のお石の家を覗いてみた。お石は納戸の前で、帯を絞てゐた。彼は燻つた籠の前で顔をしかめていつた。

「大漁ぢや、大漁ぢや、七十樽は取れたぢやろ。今年の鱒は大きいぞ、ほうら、ほうら」

爺は槍の穂先きのやうな鋭い鱒を突つついてみた。

家の前を、心臓の丈夫な女學生を詰め込んだ二番の乗合が揺れていつた。

爺は急に空腹を感じ出した。また丘の家へ引き返さうとすると、お石がいつた。

「お前、小錢四五圓ねえだかよ」

「うむ」

「うちの虎め、鐵砲を折りよつて、金十圓送れつていうて來たのぢやが、このごろの兵隊は金を取らずに使ふのぢや、溜らねえ」

「働かずに使ふのぢや、溜らねえ」

爺は女に金を使ふのは好きであつた。殊に、好きな後家のお石には始めてだつた。

夜になると、お石は、爺の寝てゐる部屋へ金を取りに來た。爺は蒲團の中から、折り疊まれた紙幣を一枚出して女に渡した。お石は湯上りの軟かな顔をして、火の熾つてゐる七輪の傍に坐つてゐた。

「やれやれ、このお札のお蔭で苦勞をするだ」と爺はいつた。

女は黙つて、足のあかぎれの中へ膏藥を流し込んだ。

「湯は加減が良かつたけエ」

「ああ、上々ぢや」

お石の投げ出した蹠の皮膚の中で、膏藥が焼け火箸に慄へながら、ぢいぢいと鳴つてゐた。看護婦の部屋で時計が鳴つた。

爺は物慣れた閑寂の中で、猫のやうに眠りかけた。

「ああ、もう十時」

彼はまた眼をつぶつた。お石は蜜柑の汁をひとり勢ひ好く飛ばし出した。

「此の次の日曜には、あの病人は退院ぢや」と爺はいつた。

「そしたら、爺はどこ行きぢや」

「おらア、そしたら、また漁に出るぢや」

七輪の炭がざくりと壊れた。爺はまたる眠りをし始めた。

入江を圍んだ蜜柑林からは、實がだんく減つていつた。さうして、冬に向ふと、漁師町は鰯のために賑はひ出した。若い女の爪のやうに桃色の渚が柔かに、曲つてゐた。鰯の腹が廣大な面積を廣げて横たはつた。入江の空では日の光りが硝子のやうに交り合つた。その並んだ鰯

の小徑の間を、間屋の主人はオートバイで駆け廻つた。岬を廻つて来た旅藝人が蒸小屋の前で踊つてゐた。鳥は投槍のやうに魚をかすめて舞ひ上つた。

沖からは泡沫を含んだ風が吹きつけた。海は次第に荒れて来た。

雪が降り出すと、風は急に鳴りやんだ。入海は貯水池のやうに静になつた。漁船の上で雪が

だんだん凍り出した。

山峽の病院では、毎夜狐が出て来て鳴いた。爺と看護婦とは終日病人の枕許で話してゐた。

寒さに燃料の公給は、二人にとつては何よりも幸せだつた。

雪は毎日降り積つた。桃色の昇永水は病院の廊下で凍つてゐた。温泉町へ通ふ乗合自動車は

獣のやうに雪を割つて通つていつた。沖は暗憺として暗かつた。

お石はもう四五日も爺の所へ来なかつた。彼女が彼から金を借りてから、二人の關係はそれ以上

上の何物でもなかつた。それが爺には何となく物足りなくなつた。

爺は食料品の買ひ出しに町へ出かけた。店には船が着かないために野菜はなかつたただ僅かに

萎びた大根が二三本轉がつてゐるだけだつた。爺は冷酒を傾けると鐘詰を抱いてまた坂道を

歸つて来た。すると近よつて来た荷馬車の上から、破れた洋傘を傾けたお石が爺に笑ひかけた。

「お前、どけ行つた」

「よう降るね、これぢや、冷上つてしまひさうだよ。お前、買ひ出しか」とお石はいつた。

「風呂が湧いてるよ。暖まつて行かねえか」

「今日の風呂なら、一ぱい買つてもいゝだよ。今夜ゆつくり御馳走になるべエ」

馬車はのろ／＼通り過ぎた。蜜柑畑の雪の中で、雀が喧しく囀り出した。爺はひとりになると、子供のやうに雪を固めて投げつけたが、ふと彼は思ひ出して呟いた。

「持てよ、今夜ゆつくり、御馳走になるべエ。——と」

彼はお石に日ごろの胸を見せるには、一杯飲んでからだと思つた。彼はまた酒を買ふために坂道を引き返した。が、一町も行つたと思ふと、急に何事も馬鹿々々しくなつて來た。彼はまたそのまゝ病院の方へ登つていつた。

「なんて悪い道だんべ。こん畜生、此ん畜生」

お石は病院の門板につかまつて雪を落した。外は雪明りで光つてゐた。中へ這入るとお石はいつた。

「ああ、いゝ火が熾つてゐるなア、もうかう年寄れば、駄目だ。雪につまつて、歩けねえだ

よ」

「いやア、さうでねえさ。お前の顔色、まだ十七八だや」

「はは、いゝ、いゝ、件が兵隊さんだねえか」

「後家になると、女は光るもんぢやなう」

「さうかなア、ぢや、まだ貰ひ手があるかも知れねエだ。春にでもなつたら、一つ、世話でもして貰ふべエか」

お石は湯へは入つた。爺は竈の下を燃やしてやつた。二人は壁を隔て、山の芋の話をし始めた。

お石は湯から上ると、爺の傍へ坐り込んだ。

暫らくすると、爺はまた十圓札を一枚蒲團の下から出さねばならぬ羽目になつた。

お石が歸ると、爺はゆつくり煙草を一服吸ひ込んだ。と、ひどく啖が絡んで來た。彼は坐つたまゝ、疊に頭を擦りつけて發作の熄むのを待つてゐた。戸の隙間から流れ込む外氣が爺の脊中に沁み始めた。と、いつの間にか七輪の火は消えてゐた。

ずる／＼延びた患者の退院の日が近くなつた。患者がみなくなると病舎は閉鎖されねばならなかつた。爺もどこかへ職を求めに行かねばならなかつた。

若い患者はベッドの上に仰向きになりながら嬉しさに爺にいつた。

「こんなに雪が降つちや、自然薯も掘れまいね。今度うんと掘れたら、少しくれないか。一杯

おごるよ。このごろ俺の友人で自然薯探しに出かけて、狐に購されて、むすびを食はれて歸つた奴があつたつけ」

退院の日になると患者は爺に送られて歸つていつた。雪はやんでゐた。蜜柑畑は厚く積んだ雪の中に、雪溶けの滴を雨のやうに落してゐた。病院は積つた雪の底で凍つてゐた。入海は際限なく輝くきらきらした雪の堆積に圍まれて、藍色に黝んでゐた。

爺は病院へ歸つて來ると、長く床の下に抛り込んであつた山芋掘りの道具を引出して土を落した。もう彼はお石のことも貸し金のことも考へなかつた。いよく病院が閉鎖となれば、その間山芋掘りで生活しようと爺は考へた。

古 い 筆

(小品集)

竹の花

竹の花が切れ切れな霧の中から浮んでゐた。木橋は動かぬ水に枯れた足を映して蹲んでゐた。空色のボタンのやうな實をつけた草の中を、水は靜に深く曲つてゐた。少年は母の病ひが何んであるかを知らなかつた。彼は持つてゐる藥の瓶と竹の幹とがどちらがよく光るかを較べてみた。竹馬の音が竹の花の中から、こつこつと聞えて來た。彼は首を立てて鋭く眼を光らすと、不意に一散に花の中を駈けていつた。竹林を抜けると波を打つた薬屋根の下で重い石臼が廻つてゐた。石臼の傍では鈍煙管の鈍い光りが籠の肩を叩いてゐた。彼は道から籠を見ると、その下の灰の中からやがて圓圓と轉げ出す芋の溫度を手に感じた。再び竹林が續くと、彼の草履はまた竹の皮の波の中で音を立てた。群生した竹の花は彼の首の華奢な生え際を擦りながら

揺れ出した。彼は光つた竹の節に圍まれて何の唱歌を唄はうかと考へた。が、彼は歌を選ぶ前に早や房房と下つた竹の花を抱いて足を跳ねた。花、撓みながら彼の身體を吊り上げては地に落した。彼は花と格闘しながら顔を赧らめると腹を出した。薬の水が竹の泡を立てて膨れてゐた。彼は漸く花を放すとまた次の一叢の花へ抱きついた。跳ねつた竹の花の頭が高く彼の草履を跳ね上げた。彼は蟬のやうに竹にとまつたまま不安さうに草履の落ちて来る音を聞いてゐた。

鯉

春雨が續いて川は草の上へ溢れてゐた。少年は簑を着た農夫の傍に蹲んだまま釣竿の先端を睨んでゐた。雨の滴りが農夫の簑から少年の小さな簑の肩へ落ちて来た。彼はやがてすつぱりと水面から抜け上る鯉の胴の端正さを感じると、身を打つ雨も忘れ出した。深く水の中へ垂れ込んだ藤の枝がぬらぬらと滑りさうに水垢をつけて溜つてゐた。赤い蟹が雨に洗はれた草の根の中から這ひ出て来ると彼の指の間で泡を吹いた。そのとき遠い野の末の綿の花の中を一行の葬が續いていつた。ふと、彼は死にかかつてゐる母の青い顔を思ひ出した。間もなく母は死ぬだらう。鉦を自分は叩くだらうと彼は思った。すると、突然、彼は聲を上げて泣き出した。

が、その瞬間、釣竿から一疋の黒々と光つた鯉が躍り上つた。彼はぼつたり泣きやむと、周章してその鮮烈な鯉の鱗の上へ飛びかかった。鯉は濡れた草の若芽を潑灑と叩きながら彼の両手の甲から跳ね上つた。彼は鯉を壓へると、草を壓へた。が、また壓へると、また跳ねた。彼は胸で鯉の胴の上へ冠ざると、また前の續きを泣き始めた。煙るやうに連なつた綿の花の中からは鉦が蕭條と聞えて来た。彼は胸を叩く鯉の尾の壓力を厳しく感じながら、「お母ア、お母ア」と呼び續けた。

水 晶

鶯の聲が繁つた梅の葉の暗鬱な中で老け始めると、少年の母の血色は直つて来た。彼は日に姉と一緒に搗く米が白の中で糠を出して濕める重々しさが好きであつた。彼は陽が輝やいてうらうらと陽炎が立ち昇ると、裏山の小高い頂きへ水晶を探しに出かけていつた。彼は谷間を向いて兩足を投げ出しながら股の間の土を掘つた。爪に痒き出される褐色の土の中から、六方體の水晶が輝きながら湧き出て来た。彼の足の間からは清らかな生殖器が曲つた蕾のやうに谷間の方を向いてとまつてゐた。その下の谷間では、泰山木の花が白い扇のやうに枝の先きで崩れてゐた。草に埋もれた水車はゆるやかに羽根を慄はせて廻つてゐた。彼は着物で水晶の角面

に磨きを入ると空に翳して眼を細めた。彼は両手でざくざく水晶を振りながら、陽炎に揺られて山を降りると、その水晶を水壺の陰に埋めて少年の物思ひに耽るのだ。やがて、その壺から流れる水は水晶を大きく繁殖させるにちがひない。やがて、母の病ひはその水晶の賣價で癒つていくにちがひないと思ひながら、その夜彼は鱒を咬み切つてゐる姉の齒の傍で、山の頂から頭を並べて噴き出て来た水晶の光景を物語つた。庭の梅の葉の中へ射し込んだランプの光りの中では、彼の両手を擴げて物語る影が伸縮しながら揺れてゐた。

花 蝶

柿の臺が五月雨に打たれて落ち始めた。家の前を流れる小川の水が増して来た。釘のやうな溝貝が石と石との間で肉を延ばして膨れて来た。青みどろの鬚が小川を渡る少年の尻をすくつて送らせた。蠟が桶の底や水壺の周圍に生え始めた。彼は朝起きると雨戸を開けた。堅い梅の實が雨戸の木目を擦つてざくざくと音を立てた。彼は一夜の風で地に充ちた柿の臺を見ると勇しさを感じて叫び出した。彼は軒へ廻ると杏の實がいくつ増したかを數へるのが楽しみであつた。杏の木肌は皺の割れ目に脂を溜めて光つてゐた。囊の幹は觸ればぢくぢくと皮が崩れて来て手についた。雨が上ると彼は往來に突き出たその囊の樹に登つて枝を踏みながら斥候の眞似

をした。すると、彼の手で造られた双眼鏡の中へ車輪の上に浮んだ花嫁の姿が現れた。やがて、花嫁を取り圍んだ一團の車が彼の股の下を通り出した。彼は俯向いて覗くと、それは彼の母の所へ通つてゐた針子の中の一美しい娘であつた。彼は口を開けたまま、囊の滑らかな葉の中で萎れ出した。白い花嫁の姿は目をつけた溝に沿つてだんだん遠くの方へ曲つていつた。

虫

螢が橘の花の周圍を飛び始めた。草を潜る水音が夜露の底から聞えて来た。篝火が夜毎に田園の上で燃え始めた。農夫は風呂から夜風に吹かれながらのびのびと歸つて来た。梅雨が上ると少年は母の眼を盗んで夜遊びをし始めた。彼はだんだん煙草の煙りの匂ふ大人の集りが好きになつた。彼の母は床を疊んで家の中を子供のやうに歩き始めた。彼は道を歩くと投げ上げる手頃の石を選び出した。彼の姉は山椒の葉を噛みながら彼の夜遊びの後を捜し廻つた。彼は葉の中から一齊に光澤を増して露はれ出した果實の群れを、あちらこちらから透かして見た。つるつる滑る杏は蟲に食はれて川へ落ちた。黄色く膨れた囊は少年の手紋を浮べたまま食ひ忘られて轉げてゐた。梅は地の上に豊香を放つてうず高く積つてゐた。その梅の中を梅賣りが日籠を擔いで通つていつた。彼は玉蟲が柘榴の花影でだんだん羽根をかためていくのを知つて

碑
文

みた。遠く離れた藪の中で、頬白が幾つの卵を産んであるのかまで知つてみた。さうして、夏が来ると彼は瓜畑の中を蟲のやうに次から次へと瓜を食ひ荒して流れていつた。

雨は降り續いた。併し、ヘルモン山上のガルタンの市民は、誰もが何日太陽を眺め得るであらうかと云ふ豫想は勿論、何日から此の雨が降り始めたか、それすら今は完全に思ひ出すことも出来なくなつた。人々の胃袋には水が溜つた。さうして、婦女達の乳房はだんだんと青く脹らみ、赤子や子供は水を飲まされた怒りのために母親の乳首を噛んだ。

最早や人々は空を見飽きた。高窓から首を差し出して空を仰いでゐるのを見ると、通行人は腹立たしさに歩道の上で嘲弄した。

「ああ、高窓からガルタンの太陽が現れた」

忽ち怒つた顔が高窓から椅子や器物を歩道の上へ投げつけた。續いて礫が高窓を狙つて飛び込んだ。が、またそれは忽ちの間に鎮ると、後悔の標に、彼らの蒼ざめた顔が高窓の上と下とでげらげらと笑ひ合つた。

日に日に酒麴を冠つて横たはつてゐる醉漢が、歩道や廻廊や石階の上に増して来た。

「ガルタンの空は早魃である」

「ガルタンの市民は、レバノンの成樓のごとく干されるであらう」

彼らは瞞着した皮肉を浮べながら、酒舗から酒舗へ蹣跚として踰踉めいていつた。が、彼の頭は夜が来ると一様に牙え渡つた。時々深夜に狂つた管絃樂が突發した。すると、忽ち城市の方方からは、亂雑な舞踏が一齊に爆けた鋼螺線のやうに噴出した不眠に懊む者達は寢臺の上から飛び降りた。さうして、彼らは何時の間にか、見ず知らずの者と一つの集團を作りながら歩道や廻廊の上を暴徒のやうに躍り廻つてゐる自分を知つた。が、立ち停つて顔を見合せた瞬間、彼らは不可解な憎悪を感じて互に侮蔑の視線を投げ合ふと又躍つた。

併し、雨はヘルモンの山に降り續いた。

「吾らの市民よ、ガルタンに危機が来た。ヘルモンの山に危機が来た」

大道の四つ角で、片腕に酒麴を抱いたまま拳を振つて群衆に叫ぶ志士が現れた。すると、直ちに聽衆はなくなつて群衆は盡くその場で志士となつて拳を振つた。

「吾らの市民よ、ガルタンに危機が来た。ヘルモンの山に危機が来た」

彼らは直ぐさま酒麴へその唇をあてながら、酒舗や劇場へ雪崩れ込むと、魚のやうにべた

べたと大理石や白檀の上へ酔ひ潰れて又叫んだ。

けれども、雨は降り續いた。日に日に市民の死者が急激に増加した。それら死者の顔は老若男女に拘らず、皆一様に老耄の相に變つてゐて、齒は揺るぎ、窪んだ肉の影には岩のやうに疥癬の巢を張らせ、さうして、彼らの頭髮は引けば茹だつた芋毛のやうに、ぼくぼくと撈れて来た。

或る日、ガルタンの哲學者らは盡く市の會堂に聚められると、此の未曾有の大降雨の原因と、それに應ずる救済方法に關して執政官の面前で論争させられた。或る哲學者は、ガルタンがヘルモン山上に位置するを以つてと云ひ、或る者は新生の惑星が城市の上空を飛遊しつゝあるが故と論じ、またある者は、數千年に一度飛翔し來る雲の大塊が、今やその動力を失つて彷徨しつゝあるを以つてと結論した。併し、此れら様々の言葉は、夫々皆降雨に應ずる救済方法に關しては忘却の態度を裝つた。が、中の一人は口を開いて。

「ヘルモンの山を降りよ。ガルタンの市民はガイザリアへ逃げよ」

「空は續いてゐる」と一人は云つた。

「ガルタンを捨てて、ボルペレオンへ行け」

「見よ、ヘルモンを下る大道は瀑布である」

「ガルタンを守れ、雲は空の如く大きくはならない」
 「日に隙間を擴げるガルタンの穀庫は七つである」
 會堂は静まつた。滔々として山から落ちる瀑布の音は高まつた。その時、立ち上つた哲學者は名高い醜男のカンナであつた。

「ガルタンの哲學者らよ、卿等は賢明の武器を捨てよ、卿等の祖父と父と妻とを吾に告げよ。卿等の子と孫とをガルタンに授け、嗚呼ガルタンの道念は、地に倒れたソロモンの旗の如く穢された。ガルタンの哲學者らよ、卿等は碧玉を飾つた裸形の首と、杯盤の香りを忘れて空を見よ。大いなる神は怒つた、ガルタンの市民は、マハナイムの祭りに焼かれた犠牲のごとくヘルモンの山上に載るであらう。嗚呼ガルタンの哲學者らよ、卿等は額に服罪の水を受けてガルタンを神に返せ。今や吾がガルタンの上には、滅亡と共に神の淨き愚與物が自殺となつて下つてゐる」

會堂に並んだ哲學者達の面色は蒼然として變つて來た。會合の詳細な報告は直ちにガルタンの城市に擴つた。

「大いなる神は怒つた。ガルタンは絶滅するであらう」
 恐怖の波が人々の胸から胸を、揺るいでいつた。ガルタンの大路小路では、叩かれたやうに

亂舞が止まつて祈りの聲が空に上つた。その昔美しい妻を奪われた獨身者のカンナは、その夜、竊に階上の觀臺からガルタンの城市を見下した。

「ガルタンよ、爾は爾の醜き慣習のために滅落するであらう。嗚呼ガルタンよ、滅亡せよ、今や爾は吾のためにバタラピンの池のごとく亡びるときが來た」

彼は醜い顔に市民に放つ復讐の微笑を浮かべながら、酒を呷つて首筋の動脈を切斷した。併し、彼はふと傍に立つてゐる飲み干した酒甕に氣がつくと、その日會堂を震はせた自分の堂々たる雄辯と、酒甕と、自分の死體とを思ひ比べて物語つてゐる市民の言葉が浮んで來た。

賢者は死んだ。賢者は自殺を怖れて美酒を飲んだ。賢者の言葉はエルサレムの卜者のやうに嘘言である。

彼は酒甕を抱いて立ち上つた。そして踰越として圓柱を辿りながら、部屋の中を廻り始めた。四方の壁となつて積み上げられた哲學書の山々は、到る所でその偽善を湛へた酒甕の隠匿所になることを許さなかつた。が、最後に彼は庭園の池の底を胸に描いた。彼は衣の裾から滴る血の一線を床石の上に引きながら、長く緩漫に池の方へうねつてゐる石階を下つていつた。と、途中で彼の膝はがくりと前に折れた。彼は酒甕を抱いたまゝ、崩れた切石の隙から延び上つてゐる草の上へ轉がつた。彼は起き上らうとした手に觸れて立物に身を支へると、それは軟な

一握の草だつた。彼は再び轉がつた。が、彼の優れた智謀は突嗟の間、彼の動脈の切斷口を酒甕の口に着けしめた。間もなく、血は、ガルタンのために受けた不幸な彼の生涯を、その酒甕の中に盛り始めた。

「ガルタンよ、吾に倣へ、ガルタンよ、滅べ」

血は刻々に酒甕の底から、彼の確信ある復讐の微笑をその表面に映しながら浮き上つた。それと同時に、恰もそれに伴奏するかのやうにガルタンの祈りの聲は、斷滅しながら黒まつて長く續いた葡萄園の上から流れて來た。

「ガルタンよ、吾に倣へ、ガルタンよ、滅べ」

カンナの頭は酒甕の口から切石の上へ上つて落ちた。酒甕は顛覆した。血は彼の全身に降りかかる、酒の香りを上げつつ段階を一つ一つと下つて池の方へ流れていつた。

「聰明な賢者は死んだ。ガルタンに下つた福音は自殺である」

翌日から市民の間に自殺が流行し始めた。初め彼らの多くは、穢れたガルタンの慣習に怨恨を持つ失戀者や疾病者や不具者であつた。が、彼らを先驅に立てて、その後日を追つて益々健全な市民の多くが自殺した。さうして、最早や彼らの首の動脈は、僅か一片の嘲笑と冷顔とで購ひ得るにいたつたが、しかし、彼らはその生の終末に臨んで、各々廻廊の壁に市民の罪業の

數々を刻みつけた。彼らの懺悔の心は、彼らの過去の悪業を刻み、彼らの怨恨は、生き残る市民の秘めた悪徳を彼らに刻ませた。このため、日ならずして城市の壁は、穢れたガルタンの罪跡を曝露した石碑となつて雨に打たれた。人人は壁から壁へと押し流れて、日に現れる新しい壁の文字を読み渡つた。

「ああ、爾は吾に石を背負せた銀子をもつて、イスラエルの女の首に手を卷いた」

「ああ、爾は吾が妻の腹に爾の子を落して逃亡した」

「爾はシユラミの婦女のために、吾の娘を葡萄のごとく壓し潰した」

「爾は一片の番紅花を、んとして、シオンの商人に身を投げた」

「爾はアマナの山の牝鹿のごとく、八十人の男子に吾の眼を盗んで爾の胸の香物を嗅がしめた」

「ああ婚姻の夜の爾の唇は、廻り繞つた杯盤のやうに穢れてゐた」

ガルタンの城市では、このときから自殺の流行が衰へ始めると、それに代つて遽に殺人が流行した。怨恨者の復讐の劍は根鏑のまま、破廉を秘めた市民の胸へ公然と突き刺さつた。それに和してガルタンの賤民達は、一齊に歡樂の篡奪者として貴族や富豪を殺戮した。悲鳴と叫喚が幾日も續いていつた。廢れた花園や路傍の丈延びた草叢の中には、到る所、男女の死體が酒

盃のやうな開いた傷口に雨を漉へて横たはつてゐた。併し、雨はますます降り續いた。ガルタンの殺戮は次第にその勢ひを弱めていつた。が、それにひきかへ、市民の肉體は日に日に激しく性の衝動を高め始めると、終にガルタンの城市は、ヘルモンの山上で、聲を潜めた一大賣淫所と變つて來た。彼らの中の薄弱な肉體は、横たはつたままに死へ落ちた。併し空は彼らの頭の上で、夜を胎んだ雲のやうに層々として暗み増した。さうして、今やガルタンの市民は、過去の一切の記憶を忘却し、眠りに落ちる青白い獸であるかのやうに、ただ呆然と生きてゐるにすぎなかつた。

ガルタンの中央のガンタアルの大路では、二人の市民が雨に打たれたまま、凡ゆる刺戟に麻痺した鈍感な眼をして立つてゐた。すると、突然一人の頭の中へカンナの豫言が浮び上つた。彼の垂れ下がった兩手は遽にぶるぶると慄へて來た。

「吾らは絶滅するであらう」

彼の叫びを聞くと同時に、他の一人の眼は急に光りを發して擴がつた。

「何に故か！」

「吾らは絶滅するであらう」

「何に故か！」

二人は肩を摺み合つた。さうして、仇敵のやうに相手の眼の中を覗き込むと、無言のまま激しくその肩を揺り合つた。と、二人は相手かまはず過去の鬱積した憤怒を一時に爆發させて、互に掴んだ肩を突き放した。

「瀆神者！」

「姦淫者！」

「篡奪者！」

「欺瞞者！」

二人は餓えた白痴のやうに顔を振りながら、大道を彷徨ひ歩いてまた行き合ふ人々を罵つた。

「ガルタンを滅亡せしめたは爾である。ガルタンを吾に返せ」

「爾のためにガルタンは滅亡した。ガルタンを吾に返せ」

大路の人々は立ち所に酒甕で二人を打つた。が、二人は酒甕の破片を全身に突き立てたまま、尙知らざるごとく人々の間を吠え狂ふと、その聲を聞きつけた者達は、一齊に忘却してゐた。ガルタンの記憶を投げつけられて戦慄した。と、忽ち彼らは二人に感染した狂人のやうに怒り出すと、また相手かまはず行き合ふ人々を打ち叩いて罵り合つた。

「ガルタンを滅亡せしめたは爾である。ガルタンを吾に返せ。爾のためにガルタンは滅亡した。ガルタンを吾に返せ」

大路の上を車輪や礫が酒甕の破片と共に飛び廻つた。が、更に怒りの群れは死骸や蠢動する負傷者を蹂躪して、ドアや窓から四方の屋内に闖入した。そこでは楽器や倒れた彫像や寢臺や硝石が飛び散る血潮のために見る見る新鮮に塗り變へられた。さうして此の狂つた憤怒の集團は、絶望と煽られたガルタンの恐怖の上を、不規則な雲のやうな形を描きつつ、壁を突き破り、石堀を乗り越えて、火を待つ油のやうに益々四方へ追ひ擴つた。それはその狂氣の行く先き先きに、恰も無数の怨恨が聲を潜めて地に齧伏してゐたかのやうであつた。それは夜となく晝となく中間を空虚にして續いていつた。併し、この狂暴の最後に残つた勇者らは、その體軀を打ち衝てる目あての物が、ただ堅牢な石壁や石柱や樹木となつてゐるのに氣附いたとき、彼らは踰越めきながら半眼を開いたまま、啞者のやうに黙つて終日同じ所を歩き廻つた。が、彼らの中の多くの者は、石柱や石堀に突き衝つて倒れると、最早や再びとは起き上つて來なかつた。ヘルモンの山上から流れる雨水は、血の瀑布となつてガルガルの溪谷の方へ落ちていつた。ガルタンの城市では、壞れた樂器や酒甕が僅に生き残つた二人の市民の足の裏で、時々その破片を鳴らせるに過ぎなくなつた。が、或る時その最後の二人の者は、廻廊の端で突き衝つ

た。二人は幽かに呻きを漏らすと抱き合つた。彼らの齒は咬み合ふやうに暫く虚空を咬んで慄へてゐた。さうして、二人の身體は互に暖まりを感じ始めると、彼らは抱き合つたまゝ眠りに落ちて横に倒れた。

かくしてガルタンは永久に沈黙した。高い宙空からガルタンの城市を見下すと、人々の行跡を刻んだ壁の周圍に、點々としてゐる市民の死骸は丁度蠍のやうに青白く見えてゐた。併し雨は依然としてヘルモンの山に降り續いた。

七階の運動

七階の運動

今日は昨日の続きである。エレベーターは吐瀉を續けた。チヨコレートの中へ飛び込む女は靴下の中へ潜つた女。ローフモンタントにオペラバック。パラソルの垣の中から顔を出したの
 は能子である。コンパクトの中の懐中鏡。石鹼の土手に續いた帽子の柱。ステッキの林をとり
 巻いた羽根枕、香水の山の中で競子は朝から放蕩した。人波は財布とナイフの中を奥へ奥へと
 流れて行く。鐘詰の谷と靴の崖。リボンとレースが花の中へ登つてゐる。
 久慈は進行して来る紙幣の群れを掴みながら、競子の視線を避けてゐた。香水の中から彼女
 の瞳がカウンターへ反撥する。

「あなた、いいわ」

「今は午前だ」

パラソルの中で、能子の微笑が痛快がる。新婚の若夫婦の眼前で、青春とはかくの如し、と

ぼんぼん羽根枕を叩きながら、

「ええ、ええ、これならお丈夫でございますわ」

無論、能子には覚えはない。昨夜は競子と久慈を張り合つて歸つて来た。邪魔をするのが目的だ。久慈を愛してゐるが故ではない。誇らかな競子の半世紀遅れた肉感を、嶄新な諧謔で壓倒してやるためである。彼女は羽根枕の賣上げを久慈の傍まで持つて行つた。

「はい」

「やア」

「少しはこちらも見て頂戴」

「今暫く」

競子は足先で床を叩いた。香水が三本賣れば三べん久慈のネクタイへ息を吐きかけることが出来るのだ。だが、此のぼんやりしたシクラメン、オーデコロンは憎々しげに光つてゐる。

能子はわざわざ競子の肉感を驗べるために前を廻つて歸つて来た。

「忙がしさうね」

「ええ、御覽の通り」

紙幣行進曲に合わせてデパートメントは正午へと沸騰する。エレベーターのボーイは七層の空

間を上つたり下つたりしながら、その日の時間を消していつた

久慈がカウンターへひつ付いてゐるのは生活のためではない。此のデパートメントの持ち主の道樂息子は永遠の女性を創るがためだ。生活は彼にとつては嘘のやうに方便だ。彼は七層のシヨップガールを次から次へと舐めてみるシヤベル。永遠の女性は彼に於ては寄り集めて創られる。競子は胴で能子は頭、肩や手足は七階の毛布や机の中で動いてゐる。容子。鳥子。丹子。桃子。鬱子。彼の小使は一月月に二萬圓だ。百貨店の七階から街路へ向かつて振り撒いても、電車や自動車の速方は鈍るだらう。

久慈は二階へ昇つて行つた。鬱子は半襟の中で胃袋のやうに動いてゐる。彼女は久慈にとつては永遠の女性の右脚だ。その癖彼を片肩に擔いだまま、片足に重役を履いて馳け廻るのも美事である。

「あら、久慈さん、お暑いのね」

「下はここよりなほ暑い」

「ここも暑いわ」

「もう一寸、笑つてくれ」

「だつて、まだ氷も飲めないの」

久慈は十圓札を握らせて三階へと登つて行く。封筒の中に、レツテルのやうに埋つてゐるのは軽い桃子。

「もう少し暴れなければ」

「だつて、暑いわ」

「だつてハンカチ位はあるだらう」

十圓札をハンカチに包んで投げ出すと、久慈は四階へと昇つて行つた。婚禮調度品の大鯛小鯛に挟まつて、丹子は汗をかいたまま夕暮の來るのを待つてゐた。

「まア、素通りするなんて」

「今日は人がゐないぢやないか」

「だから、寄つたつていいぢやないの」

「人がゐなければ、人眼につく」

「五階へお急ぎになるのには、悪いわね」

「四階で疲れて了つては、意氣地がない」

丹子は女中のやうにお饒舌だ。ここで擱まると、五階の會話が短くなる。振り切り賃を鯛の腹の下へ押し込んで、五階へと急いで行く。鳥子は金屬の中に、刺つた花のやうに浮いてゐ

た。近よる久慈の方へ指を上げながら

「けふは冗談を仰言らないで」

「僕は休憩時間だよ」

「だつて、あたしはこれからの」

「五階まで昇つて蹴られては、降りられない」

「まア、もう少しあちらへ行つて」

「これほど離れてをれば、汗もかくまい」

「あそこで人が見てるぢやないの」

「ぢや。これはいくらでございます？」

「はい、それは三十五錢でございますの」

久慈は爪切を一丁買ふと十圓紙幣を支拂つた。

「お釣はお宅へ」

六階へ昇ると、笑つた容子が鏡の中に五人もゐる。

「どちらが君だ」

「あら、今日の巡禮はお早いのね」

「だから、練習と云ふものはしておくものさ」
 「道理で能子さんがおしやべりになつたのね」
 「そりや、君だ」

「あたしがおしやべりになつた？ つて」

「誰だかそんなことを云つてたよ」

「そりや、あたしが、六階あたりにあるからよ」

「人里はなれて暮してゐると、下界のことが氣になるな」

「こんな所で、お婆さんにはなりたくないわ」

「いや、物事は、高い所から見降ろすものさ」

「でも、高い所へはなかなか男の方は来ませんわ」

「なるほど、君は、今日は満点だ」

二枚の十圓札が、いきなり容子の帯の間へ突き刺さる。

「まア、もう逃げ支度をなさるのね」

「時間だ」

「そりや、下でお涼みになる方が、濕氣があつて一

急轉直下、久慈は運動が終ると七階からエレベーターで馳け下る。彼は能子の傍へ近かついた。彼には能子は苦手である。此の「永遠の女性」の頭だけは彼の十圓紙幣で効いたためしは一度もない。それ故彼の心理學はいつも此處まで来ると狂ふのだ。彼は賭博に負けたマニヤのやうに、十圓札を彼女の前へ重ねて行く。だが、能子の云ふのはかうである。

「あなた。何ぜあなたはあたしにこんなにお金を下さるの？」

「君が、受けとりさうにもないからさ」

「ぢや、あたし、貰つておくわ。だけど、あなたは、馬鹿だわね」

「いや、僕より、君の方が賢いのだ」

彼女は彼の誘惑に従つてどこへでもついて行く。だが、彼女は彼の誘惑にかかつたことは一度もない。

「あなた、なぜあなたは、あたしの心がお分りになれないの」

「分つて了へば、それまでだ。なるだけ、君だけは、百貨店の法則から逆に進行しててくれ

給へ」

「さうすると、あたしにこんなにお金が出て来るの？」

「いや、それは君が金を馬鹿にしてゐる賃金さ」

「だつて、あたしは、あなたがあたしにお金を下さることを馬鹿にしてゐるのよ」
 「それは勝手だ。だが、金を君にやるからと云つて、僕を馬鹿扱ひにするのは御免蒙る」
 「だけど、そんなことをなすつてゐると、今にあなたがお金のやうに見えて了ふわ」
 「つまり、人間に見えないと云ふんだな」
 「ええ、さう。あなたはお金よ。たつたそれだけ」
 「今度は化物扱ひにし出したな」
 「だつて、あなたは、それが本望なんですもの。あなたは人間の感能がお金でどこまで發達してゐるか、驗べる機械のやうなものなのよ。ね、あたしはあなたに、どんな參考になつてゐるの！」

「君は、今の百貨店の賣上高では、分らない」

「ぢや、あたし、あなたにもつと勉強するやうにさせて上げるわ。そして、そのときになつたら、あたしあなたからお金をとつて、それをみんな、あたしと一緒に働いてゐる人達に振り撒くの。さうすると、品物の能率が上がるでせう。そして、あなたがもつとお金をおとりになるでせう。そして、またあたしが澤山とつて、それを人々に振り撒いて、ね、あなたはその間にいろいろいな女の方に飽くことを練習するの。今はまアあなたの過渡期だから、あたしは黙つ

て見てゐるわ。まア、あたしは、ここ暫くはあなたの柔い監督ね」

「うっかりすると、君は社會主義者になりさうだよ」

「ええ、さう、あたしは、あなたん所の労働者よ。萬國の労働者よ團結せよつて云ひたい方なの。だつて、あたしは、朝の八時から立ち詰めよ。あなたのやうに運動がてらに七階まで上つて行つて、一枚づつお幣をくばつて降りて来て、それから競子さんを自動車に乗せて飛び廻ることなんか、新しい仕事だなんて思へないわ」

「ぢや、新しい仕事なんて、どこにある？」

「あるわ。ここに。あなた、一枚お幣を出してごらんさいな」

「よし、その手は分つた」

「あなたのお豪い所は、そこなのね」

「何に、もう一度云つてみてくれ」

「そら、そこ。あなたはあたしと、本當に馬が合つてゐるんだわ。あたしはあなたを、馬鹿にときどきするんだけど、かうしてゐられるのもあなたの人柄がさせるのよ。まアあなたは七階まで運動なさるだけあつて、爽やかで、潤達で、理解があつて、善良で朗らかに光つてゐる癖に傲慢な所がちつともなくて」

「また、一枚とられるな」
 「あなた、お止しなさいよ。そこがあなたのいけない癖よ。運動なすつたい癖が臺なしたわ」

「だつて、あまりやつつけられちや、口止めする方が安全だよ」

「あなたは、他の女の方にお出しになる手を、あたしにまで出さうとなさるから虐めるの。あたしがあなたからお金をいただいてゐるのは、あなたの生活をただお助けしてゐるだけよ。あなたはお金を撒くことだけが、生活なの」

「まア、云はば、君は少し野暮臭い、と云ふ方の女だよ。僕に意見をしてくれるのはありがたいが、もう少し、僕の金の撒き方に好意を見せてくれないか」

「だつて、好意の見せ場が見つからないわ。あたしが一寸愛嬌を振り撒くと、また一枚と來るんでせう。それぢや出て來る愛嬌だつて溜らないわ。あたしにはあなたがお腹で、あたしの愛嬌にお點を點けてゐらつしやるのが分つてゐるの。これからあなたが愛嬌を振り撒いたら、あなたを馬鹿にしてゐるときだと思つてゐて頂戴」

これが能子だ。久慈が金で創つた永遠の女性の頭だけは、いつまでたつても頭を横に振り續ける。久慈は能子に逢ふと世界が新鮮に轉倒した。彼女は酒だ。彼は能子の唇を狙つて傾い

て行く患者である。

水滴型の自動車はその膨れた尖端で、街を落下するやうに疾走した。久慈と能子がホテルへ行くのである。ガードの下腹。鐵の皮膚に描かれた粗剛な朱色の十字を指差して、能子は云つた。

「あなた、あたしはあれが恐いの」

久慈が振り向くとガードの上を貨物列車が轟進した。擦れ違ふオートバイ。電車の腹、警官の両手をかすめてトラックが飛び上る。キヤナルの水面に光つた都會の足、下水の口で休息してゐる浚渫船

「あなた、あたしは、あれが好きなの」

ホテルでは、クツションの中から百貨店の匂ひがした。久慈は上着を脱いでテラスへ立つた。噴水のアーチの中を二羽の鷺鳥が夢のやうに泳いでゐる。

「まア、あれを御覽なさいな。あれは古風な戀愛よ。あたしはあんなのを見てゐると、羽根枕を目茶苦茶に叩きつけてやりたくなるの」

「君には情緒といふものがないんだね」

「ええ、さう、あたしはあんな鷺鳥を見てゐると、この欄干の上で逆立ちしてみたくてならな

いの」

「僕は君とは反対だ。先づここで煙草を吸つて」

「あなたには進化といふものがないんだわ。もしあたしがあなただつたら、首を縊るより仕方がないわ」

「もし僕が君だつたら、刑務所へでも這入りたい」

「ぢや、とてもあなたとは駄目なのね。あたし、こんなことをしてゐても明日の朝は電車で足を踏まれぬやうに、と思つてゐる人間なの」

「所が、僕は、君がいたつて好きなんだ」

「まア、もう少し、お上手にお仰言つたつて」

「いや、さう云はれると羞しくなるんだが」

「あたし、あなたのお顔を見てゐると、競子さんに黙つて來たのが残念だわ」

「競子は競子」

「能子は能子？　ね、あなた、ちよつとこちらを見て頂戴。あたしは今夜は、顔を洗ひに來たんだから、もうショップガールぢやないことよ。まア、鷺鳥だつて、あんなに優しく二人の前で泳いでゐるし、あたしだつて、このボーイを蹴飛ばすぐらゐなんでもないわ」

「いや、今夜はなるだけ、音無しくしてゐてくれ給へ」

「あたしは、あなたが好きなのよ。こんなに、こんなに云つたつて。あらあら、あれはシエラザアト、あなた、ちよつと」

能子は石の上に乗つてゐる久慈の手を持つて、引き摺り降ろすと、突きあたりながら踊り出した。

「君は、なかなか亂暴だ」

「だつて、あなたのお店がいけないんだわ。あたしは氣取つたことなんかしてゐると、首の骨が痛み出すの。あたしは動かないでちよつとしてると、草のやうになつて了つて風邪をひくの」

「そりや野蠻だ」

「あたし野蠻人が大好きよ。あの裸體姿を見てゐると、身體が風のやうに擴つて飛びたくなるの」

「君には進化と云ふものがないからだ。もし僕が君だつたら、首を縊るより仕方がない」

「あら、あなたには進化がないから、そんなことを仰言るんだわ。野蠻人を輕蔑するのは、文明人の缺點よ」

「それなら君は、自分の親父と結婚するに限るのだ」

「まア、あなたは、結婚とはどんなことだが御存知ないと見えるわね」
 「冗談はよし給へ。これでもまだ結婚だけはしたことがないんだよ」
 「ぢや、どうぞ御自由にして頂戴。あたしはそのとき、そつとあなたのお顔を見て上げるわ。そしたらあなたは、きつと野蠻人のやうなお顔をなすつて、まア結婚なんて、だいたい、こんなものさつて仰言るわ」

「それなら僕と、結婚してみるのが一番だ」

「まア、そんなに恐はさうな御顔で仰言らなくても、あたし、結婚なんかいたしませんわ」

「いや、結婚すると云ふことは、こんなに骨の折れることだとは思はなかつた。さあどうぞ」
 久慈の示した部屋の方へ、能子は扇子を使ひながら、ひらひら笑つた假面のやうに這入つていつた。久慈は部屋の羽根枕にもたれかかると、黙つて能子の膝を軽く指さきで叩き出した。

「あなたは、あたしの着物が、よほどお氣に召さないと見えるのね。これでもあたしは、あなたのお店でいただいたものなのよ」

「いや、これがそれほど大切な着物なら、いま一枚上げてもいい」

「ええ、どうぞ、あたしはあなたとお逢ひしてると、着物がほしくて仕方がないの。これはきつとあなたが上品なせいなのね。もしあなたが野蠻人だつたら、あたしはあなたの前で裸體に

なつて踊つてみるわ」

「僕は一度君のさう云ふ所も見たいのだ」

「まア、あなたはさう云ふときだけは、野蠻人に好意をお持ちなさるのね」

「かう云ふ羽根枕の上へ並んだら、もう野蠻人の話だけはよし給へ」

久慈の片手が能子の胸に絡らんで来た。能子は久慈の膝の上へ飛び移ると、櫓を漕ぐやうに身體を前後に揺り動した。彼女の頭にささつたクリリツカスのヘヤピンが、久慈の眼鏡をひつぞいた。彼は顔を蟹めながら彼女の唇の方へ自分の頬を廻していつた。と、能子はスタンドの傘をくるくる廻しながら、

「鬱子、桃子、丹子、鳥子、まア、澤山で賑やかね」

「ここは、デパートメントぢやないんだよ」

「だつて、あなたのために、歌を歌つて上げたつて悪くはないわ」

「今日は、芽出度い結婚式だ。縁起の悪いことは云はぬがいい」

「そんなことを仰言ると、いつも競子さんはどんなことを仰言つて？」

「さア、立つた。今夜は僕は、侮辱されに來たんぢやない」

「まア、ぢや、あなたはあたしと結婚なさるおつもりなの？」

久慈はいつまでも黙つてゐる。
 能子は久慈の膝から立ち上つた。彼女は久慈を睨みながら、強く一振りスタンドの傘を廻すと黙つて部屋の外へ出て行つた。
 今日(けふ)は昨日(きのう)の翌日(あした)だ。エレベーターは吐瀉(としゃ)を續けた。オペラバックを嗅ぐ女(おんな) コンパクトの中に浸(ひた)つた女(おんな) デコルテアトリンにモンタント。能子(としこ)は朝(あさ)から早くパラソルの垣根(かきね)の中で、青春(せいしゅん)とはかくのごとしと云(い)ふかのやうに、ぼんぼん羽根枕(はねまくら)を叩(たた)いてゐる。久慈(くじ)は休息(きゅうそく)の時間(じかん)が來(く)ると、頭(あたま)のとれた「永遠(えいゐん)の女性(じょせい)」の手足(てあし)を眺(なが)めにまたことごと七階(ななかい)まで昇(のぼ)つていつた。

兄
妹
行
進
曲

月がまだ出ない。彼は結婚について考へながら妹と二人で海岸を歩いてゐた。岩かげで浅
 蜷が鳴いてゐる。犬が波打際を静かに藻の匂ひを嗅ぎながら歩いていった。干船の縁に腰をか
 けて兄は妹の行子に云つた。

「月が出ると、あすこの岬が光るんだよ」

「さう」

「向ふの山の形は俺は好きなんだ」

「さうね」

二人は黙つて了つた。二人はどちらも愛してゐた。

「お前は何か、さつきから俺に話したいことがあるんぢやないか」

「そりや、ないこともないわ」と、行子は云つた。

「何だ、いつたい」
 「もうお兄さん、知つてらつしやるんでせう」
 「何だ」
 「でも、まだ定めてはゐないのよ」
 「俺には何のことだか分からないが結婚かい」
 「えゝ、さう」
 「それで今日は來たんだな」
 「えゝ」
 「實は、俺も結婚しやうと思つてゐたんだが、お前もだとは思はなかつたな」
 「お兄さんも」
 「うむ、しかし、俺もまだよくはきめてゐないんだ。第一こちらが結婚しやうと思つたつて、向ふがしてくれるかどうか分からないと云ふ程度さ」
 「あたしは違ふわ、あたしは、こちらさへ良ければつて云ふの」
 「ぢや、今はうんと威張れるときだな」
 「さうなの」

「俺は、今はべこべこするときだ。かなはないね。こいつは」
 「ぢや、もう直きに、威張つてやらうつて腹ね」
 「そりや、さうだよ。いつもさう、べこべこするのなら、結婚なんか誰がするものか」
 「そんなお話は、あたし聞いとかなくちやいけないわね」
 「さうだよ。お前に結婚する氣があるなら、なるだけ男の悪い所は知つとくもんだよ」
 「あたしなんか、お兄さんの悪い所はうんと見てるから、大丈夫ね」
 「うむ、だから、俺がお前を虐めたのも、お前の役に立つて來たと云ふもんだ」
 「お禮を云ふわ」
 「俺もお前にお禮を云はなきアいけないんだが、お前にはいい所が、あるにはあるし」
 「お兄さんのお嫁さんにならうつて方もあたしみたいなの」
 「だいたい、女つて云ふものは、さう變つてるもんぢやないよ。お前と似たり寄つたりだらう」
 「男でもさうだわね」
 「さうだ」
 「ぢ、やあたし、お兄さんみたいな方、いやよ」

「俺だつて、お前のやうな女は、好きぢやないよ」

「ぢや、あたしもお兄さんも、結婚なんか出来つこないわね」

二人は顔を合せて笑ひ出した。此の二人は眞面目な証でも昔から冗談にする悪い癖がある。兄はそれを思ふと今夜だけは冗談だけはよさうと警戒した。

「結婚出来なくつてすませるなら、そりや出来ない方がいいよ」と兄は云つた。

「ぢや、お兄さんは、結婚しなきゃあられないほど、そんななの」

「さうだな。何んだかその點、少し怪しいのだが、した方が良ささうな氣もするんだ」

「あたしだつてさうよ」

「ぢや、するさ。仕方がないぢやないか」

「だつて、あたしは、お兄さんのやうに、ぺこぺこするのは今だけで、直ぐ威張られるやうなら、したくはないわ」

「ぢや、何んだな、お前は、良人がぺここしてるのが好きなのかい」

「好きぢやないけど、あんまりぢやないの」

「だつて、それが當り前さ」

「そりやね、あたしが、もし本當にその人が好きだつたら、そりや仕方がないわ。だつてあた

し、こちらがぺこぺこしなきゃならないほど、そんなにも好きぢやないんですもの」

「俺だつて、今頃は、向ふの女にそんなことを云はれてるかも知れないね」

「ぢや、もうぺこぺこなすつたの」

「いや、それだけはまだなんだが、どんな間違ひでやり出さないとも限らないぢやないか」

「いやだわね」

「いやだ。しかし、つんとしてたつて、いつかう面白くなりさうもなし、仕様がな」

「ぢや、あたしだけなり、つんとしてやらうかしら」

「そりや賛成だ。しかし、その男は、もうぺここしてるのかい」

「どうなのかしら、あれで、ぺここしてるつもりかしら」

「まだ、そんな所か」

「さうなのよ。だから、あたしもそんなに乗り氣にはなれないの」

「ぢや、こりや、俺はよほどぺここしなきゃならないな」

「そりや、是非結婚なさるつもりなら、さうなさいな」

「よし、ぢや、ひとつ、やり出すかな」

「あたし、お兄さんがそんな事を云ひ出したら、何んだか急に向ふの人が氣の毒になつて來た

わ

「向ふつて、俺のかい」

「いやよ」

「ははア、なるほど、しかし、いづれにしたつて、べこべこするのを待つやうぢや、ろくな女ぢやないんだよ」

「さうらしいわね、あたしみたいだわ」

「だから、俺は、お前のやうな女だつたら、死んだつていやだ」

「あたしだつてさうよ。お兄さんみたいな方だつたら、いくらべこべこされたつて、見向きもしないわ」

「ぢや、その男は、俺のお影で、よほどいい男に見られてるんだよ。さういふ男は、差し引いて見るもんだ」

「そりや、あたし、ちやんと差し引いて見てゐるわ」

「彼はもう饒舌るのがいやになつた。」

「まア、どちらも、なるやうになつていくさ」

と兄が云ふと、二人は憂鬱な影を砂の上に落したまま歩き出した。

二度目に兄と妹とが逢つたときにも、どちらも輕快さを無くして洗んでゐた。

「今日も洗んでゐるぢやないか。どうかしたのかい」と和郎は云つた。

「お兄さんだつて、さうだわ。馬鹿に淋しさうよ」と行子も云つた。

「俺は洗むのは當り前なんだが、お前の洗むのは、どうかしてるぢやないか。何かあつたのかい」

「あたし、あたしは、何んだか結婚するのが、いやになつて來たの」

「さアいよいよとなると、誰でもさうらしいな。俺も實は、それなんだよ」

「何んだか、いやなことばかり考へ出すもんね」

「そりや、一度はさう云ふいやなことばかり考へて、それからどうも浮き上つて行くものらしいが、我慢が出来ないつて云ふほどでもないんだろ」

「さうなの。だから却つて困るんだわ」

「俺とお前とが話してゐると、四人の心持ちが良く分る、お前の相手と、俺の相手と、それからお前と、俺とどつちも今はこんなものらしい」

「あたし、今度のはことわらうと思ふのよ」

「どうしてだ」

兄妹の結婚はどちらも定まつた。
 二人は逢ふとどちらも結婚の事については云ひ出さなかつた。たゞ時々妹が兄を見詰めて
 るる眼を、艶のある眼で睨み返したただけである。兄は云つた。
 「何とか云つたつて、いいぢやないか」
 「だつて、お兄さんだつていいわ」
 「俺はべこべこしていいよ結婚するやうになるし、お前はべこべこさして結婚するやうにな
 つたかと思ふと、いやなんだよ」
 「でも、もう直ぐ反對になるから、いいぢやないの」
 「そりや、その時を樂みにしてればこそなんだ。が、俺はちつとも嬉しかない」
 「あたしだつて、さうだわ。あたし、嬉しいことなんか、ちつともないわ」
 「何んだか、地獄へでもいきさうな氣がしないかい」
 「さうね、地獄ならまだいいけれど」
 「ぢや天國か」
 「さう」

「だつて、あまりべこべこするんですもの」
 「ぢや、お前の理想ぢやないか」
 「そりや、そんなときもあるにはあつたけど、何だかいやよ」
 「べこべこされればされるほど、他にいい男がいくらでもあると思ひ出すんぢやないのか」
 「そんなもんだわね。あたしは威張るのは好きだけど、もう少し恐い所もあつてほしいわ」
 「それなら、もつと早く云へばいいんだ」
 「あら、もうお兄さん、べこべこなすつたの」
 「お前が悪いのさ。俺はべこべこするのは、大嫌ひだつたんだ」
 「ぢや、憂鬱な顔をなさるのはあたり前だわ。そりや失敗よ」
 「どうも失敗らしい。しかし、俺のべこべこしたのは、俺の愛情に應じてやつてみたんだか
 ら、それがいやならしやうがない」
 「向ふもあたしを、そんな風に思つてるのかしら」
 「そりや、さう思はなきやアあきらめがつかないよ」
 「まア、なるやうになるわ。あたしは、もう知らないの」
 「俺も、もう拗つとくつもりだ」

「お前は昔から、かう妙に嬉しいときには、いやさうな顔をしてみせて、いやなときだとへんにはしやく癖を持つてるが、そんな癖は此のとき限りやめるがいいぜ」
 「だつて、これはお兄さんからうつたんだわ。お兄さんは何んでもさうよ」
 「ぢや、俺の癖がうつつてうまく結婚出来るやうになつたのなら、それほどいいことはないぢやないか」

「所が、不幸になつたらお兄さんよ」

「いや、俺の責任は結婚までだよ、結婚してからは良人にうつつていくもんだ」

「ぢや、今度はあたしがべこべこするやうになるのかしら」

「そりや、さうだよ」

「いやよそんなこと、あたしはいつまでも威張つてやるの」

「いつたい、それで、お前のどこがいくのかね」と兄は云ふと、しげしげ行子の顔を眺め出した。
 「いやだわ。そんなに見なくつたつていいぢやないの。あたしはお兄さんの奥さんぢやなくつてよ」

「しかし、俺の細君だとしてみると、どうも少し」

妹は両手で顔を隠し出した。

和郎と行子は結婚してから初めて逢つた。二人は暫く黙つてゐてから殆ど一緒に笑出した。
 「何ぜ笑ふんだ」と兄は云つた。

「だつてお兄さんが笑ふからよ」

「俺が笑つたつて、お前が笑ふ必要はないぢやないか」

「だつて、笑ひたいやうな顔を、お兄さんがなさるからだわ」

「ぢや、そんなに俺は、嬉しさうな顔をしてるか」

「ええさう」

「お前だつて、さうぢやないか」

「あたしは、ちつとも嬉しくないわ」

「お前は、まだ俺の癖がぬけないな」

兄と妹とは結婚してから二度目に逢つた。兄は澄ましてゐる妹を見ると、一寸いつもの冗談を云ひたくなつた。

「どうだい、もうお前がべこべこしてゐる頃なのかい」

「いけないね。時々は空気にあてるもんだよ。さうすると風邪をひかない。それから、うまい物をなるたけ食はすんだ。こ奴を食はさないと外へ出て食べたがる癖がつく」

「ぢや、あたし、困つたわ」

「お前は料理がまづかつたね。そいつはいかんど、風邪をひかすもとだ」

「お料理の本を買つてあるのよ」

「そんなもんぢや駄目だよ」

「それぢやどうしたらいいかしら」

「さうだね。ぢや、なるたけ早く練習して、その間に良人の味覚を覚え込むのだ。それから、へこぺこはしてゐるな」

「ええ、してるわ」

「それから、朝枕もとへ煙草盆を持つていつてあるな」

「いゝえ。そんなことなんか、知らないわ」

「馬鹿な奴だね、それが肝心ぢやないか。朝起きたときの第一印象が、一番肝心だ」

「むづかしいのね。あたしなんかほつたらかして寝せてあるの」

「俺とこの奴は、そこはなかなか至つてゐるよ」

「どういたしまして」

「ぢや、それ相當に幸福だと見えるな」

「いたつてよ」

「何だ、その云ひ方は」

「だつて幸福なんですもの」

「さう云ふ所は、お前の良人に似て來たのか」

「さうよ。もうお兄さんの影響なんか、ちつともないわ」

「そんな調子でやられたら、お前の良人も幸せもんだ」

「お兄さんはいかゞ、ちよつとは豪さうにしてゐらしつて」

「俺はどうも、遊びにいけなくつて弱り出したよ」

「ぢや、あたしん所のも、さうなのかしら」

「そりや、さうだよ。時々外へ出さないと。良人のへこぺこしてるのは油断ならぬぞ」

「いやだわね」

「ぢや、何んだな、お前はしよつちう傍へ置きづめか」

「ええ、さう。いけないかしら」

「さうかしら」
 「さうだよ、俺だつて、家内にあんまり正直なことを云はれると、不愉快なことがときどきあるね」
 「だつて、さう嘘ばかり云へやしないわ」
 「そこがむづかしい所なのさ、お前だけの賢さがあれば、家の中なんて、案外うまくいくもんだよ」
 「ぢや、お姉さんなんか、嘘もときどきは仰言るの」
 「うむ、やつてるね。黙つて見てみると、なアるほどと思ふことがときどきある」
 「あたしなんか、嘘はちつとも云はないの」
 「そりや、それで通用する男と、しない男とあるもんだよ、お前とこなんかは、まア、手に負へる男だね」
 「お兄さんなんかだと、困るわね」
 「いや、俺なんかだと、これはこれで、またいい所があるらしい。しかし、俺は、お前と結婚してゐると面白かつたんだ」
 「いやよ、お兄さんなんか」

「お料理は」
 「料理もうまい」
 「ぢや、あたしなんか、落第ね」
 「落第だ、そんなことぢや、すぐ風邪をひかして了ふ」
 「そんな面倒なものなら、あたし風邪でも何んでもひかしてやるわ。もう知らない」
 「知らないですませれば、結構だよ」
 「だつて、あんまり難かしすぎるわ。あたしなんか、とんとんと脊中を叩いて、まるめ込んでやるのが得意なの」
 「それぢや、お前の良人は、よほど甘い男なんだよ」
 「さうよ、甘くつて甘くつて、馬鹿馬鹿しいことがときどきあるわ」
 「それぢや、問題ぢやないぢやないか」
 「所が、問題なことも少しはあるのよ」
 「どんな所だ」
 「何だかちよつと、妬きもちやきらしいのよ」
 「それは、お前があんまり、正直すぎるんだ」

「俺もいやさ」と兄は云ふと、二人は顔を外向けて笑ひ出した。
 兄と妹とが結婚してから三度目に逢つたときである。兄は妹の顔を眺めながら、これなら大丈夫と思つて喜んだ。

「料理はどうだい」

「それが面白いのよ。あたしより、あたしんこの方が上手なの」と妹は云つて苦笑した。
 「しかし、まさかお前が食べさせて貰ふんぢやないだらう」

「それはさうだけど、あたしがいくらまづかつたつて、何んとも云はずに食べてるわ。あの人は、よほどどうかしてる人間よ」

「お前は、ぢや、よほど幸福者なんだ」

「それに、あたし、まだまだいくらだつて、ぺこぺこさせてゐられさうなの」

「生意氣なことを云ふのは、いい加減にしとくもんだ」

「だつて、ほんとよ、お兄さんとは」

「俺のところは、どうも妬きもちやきだ。俺が一寸遅くなると、もういけない」

「だつて、もうお兄さんは、ぺこぺこなすつただけは、とり返しなすつたでせう」

「とり返す所ぢやないよ。足まで拭かせてはひるんだが、いけないときになると、テコでも棒

でも動かない頑固な所があつて、不愉快だ」

「だつて、あたしなんか、頑固なところばかりだわ」

「お前の頑固さなんて云ふものは、問題にしなけりや納まるが、俺とこの奴の頑固と来てはやり切れないよ。ああ云ふ奴をうまうま落して家内にしちやつた所を見ると、どうも、よほど俺はぺこぺこしたにちがひない」

「でも、お兄さんを見てみると、そりや甘さうな所があつて氣になるわ」

「いや、良人が家内に甘いと云ふのは、こりや一つの禮儀だよ。社會に對する務めだね」

「ぢや、あたしん所のもの、そんな氣持ちであるのかしら」

「そりや、うかうか出来ないね。とかく甘い奴と云ふものは油斷のならぬ所がある。こつちがうつかりさせられて乗せられてゐるんだから、甘い甘いで氣がつかない」

「ぢや、あたしも、うちの人に氣をつけてゐてやらう。あたしは乗せられてゐるのかもしれないわ」

「お前なんか乗せやうと思つたら、一口で結構さ」と兄は云ふと、妹は考へ深さうに沈み込んで黙つてゐた。

實は兄は、妹の良人が自分のやうに奥の方まで見えさうにもない性格だと思ふと、妹の

幸福が思はれて一つ代りに虐めてやりたくなつたのだ。彼は云つた。

「そんならひとつ、お前から甘く出てやればいいぢやないか」

「そんなことをし出したら、もうあたし達はお了ひよ」

「なるほど、もう出すものがなくなるか」

と兄は云ふと、大きな聲で笑ひ出した。

が、ふと、彼は自分ら夫婦の生活のことを考へた。

「この次の俺達は、いつたい何を出し合つていくのであらうか」

すると、彼の眼前へ、急に見えぬ大きな壁が幾重とも知れず重なり合つてゐる所が浮んで来た。彼はその壁を一枚一枚手でひき剥いてゐる自分達夫婦の姿を眼に浮かべた。その壁の奥の奥には何があるのか。

「そいつは死だ」と誰かがかすかな耳打ちした。

彼は、妹の顔を黙つて見た。

「此奴もさうか」

「此奴もさうだ」とまた誰か云つた。

彼は急に妹が可憐になつた。

彼は、妹の身体を背後から攫んでみた。

兄と妹は暫く逢ふ機会がなかつた。冬が過ぎて春になつた。

或る日、彼は隣家の庭園へこつそり忍び込むと、マントの襟を立てて梅の匂ひを嗅いでゐた。

すると、家の中で、突然、夫婦喧嘩が始まつた。

「もう、歸れ、俺はお前のやうな女は、家内だとは思はないんだ」と良人は云つた。

「あたしだつて、さうだわ。良人なら、良人らしくして下さいよ。家内が少し咳きをしたからつて、そら肺病だ、そら何んだつて、あたし、あなたのやうな人は、だい嫌ひよ」と細君が云ひ出した。

「俺は、お前が病氣にならないやうに注意したんだ。俺の隣み深さも知らないやうな奴は、家

内ぢやないんだ」

「良人なら、家内が咳きをしたぐらゐ。恐はがらなくなつて、いいと思ふわ」

「誰が恐はがつた」

「恐はがつたぢやないの」

「馬鹿云へ」

「さうよ」

「馬鹿ッ」

彼は梅の匂ひが、どこへいつたのか分らなくなつた。

「やつてるな」と思ふと、こそくマントを冠るやうにして歸つて来た。

すると、そこへ、妹がひよつこり眼瞼を脹れさせて這入つて来た。

「どうした、近頃は」

「もう、あたし、いやになつた」と妹は云ふと、拗ねたやうに坐り込んだ。

「いやになつたぢや、困るぢやないか」

「だつて、あたしが悪いんぢやないわ。ね、かうなのよ。あたしうちの人に、あなたが下着を一枚こさへなくちや、いけないつて、云つたの、そしたら、下着なんかこさへなくつたつていよ、お前が亭主に下着も着せない女だつて思はれるだけで、俺の不名譽にや、ちつともならないつて、かうなのよ」

「そりや、さうさ。お前の不名譽になるだけさ」

「だつて、あたしだつて、こさへやう、こさへやうと思つてたんですもの、その所も知らない癖に、お前の不名譽だなんて、あの人、わざわざあたしを不名譽にするために、下着をこさ

へさせないやうにしてたのよ」

「馬鹿を云へ、馬鹿を」と兄は云つた。

「だつて、だつて、さうぢやありませんか。あたしが下着をこさへやうと思ふと、あの人は、そのお金を使つて了ふんですもの。だから、つひ、こさへられなかつたのよ、それなのに、わざわざあたしが、こさへないやうなことを云ふんですもの」

「それで喧嘩したのか」

「さうよ、だつて、あんまりだわ」

「そりや、お前が悪いさ」

「だつて、自分がお金を使つといたくせに」

「だつて、誰が細君を不名譽にするために、わざわざ下着を着ない奴があるものか」

「所が、あの人はさうなのよ。わざわざあたしに」

「おい、隣家でも、今ちやうど夫婦喧嘩をしてゐる所なんだよ。一寸聞いてみちや、どうだ。参考になるぜ、妻君が咳をしたのが、そもそも喧嘩の始まりなんだ。あれもなかなか愉快だが、お前のは下着か」

と兄は云ふと、大きな聲で笑ひ出した。

兄は妹の和子を隣家の垣根の傍へ連れていきたくて、ならなかつた。夫婦喧嘩をして来た妹に、隣家の夫婦喧嘩を聞かせてやるのは、とにかく興味あることにちがひなかつた。が、彼とて昨夜は妻と一晚喧嘩をしたのだそれが、今日になると、けろりと忘れた顔をして、隣家の梅の匂ひをこつそり嗅ぎにいくのである。

「しかし、どうしてかう夫婦喧嘩がどこにもここにもあるんだらう。今日は隣家とお前と二つも見たし、夕べは夕べで俺の番だ」

「あら、兄さんたちもなすつたの」と妹は云ふと急に嬉しさに笑ひ出した。

「うむ、俺もやつた。しかし俺達の喧嘩は、お前のやうな、そんな下着がどうのかうのつて云ふ低級な喧嘩ぢやないんだ。俺達の喧嘩は、もう少し高尚だよ」

「ぢや、どんな喧嘩なの」

「俺はもう、はつきりどこから喧嘩が始まつたのか、忘れたが、とにかく、そんな臆臆とした喧嘩の一種さ。俺が何んでも、良人と云ふものは、妻君を愛しないやうな顔をしたがる癖のあるもんだ、と云ふ説明を、はつきりしてやつたのさ。所が」

「さうよ、男は」

「まあ聞け、男は、細君を愛しないやうな顔は、一應人前ではしてみるが、内心は反對で、女

が男を思ふよりも、よほど女のことを思ふもんだと云ふと、芳子の奴はそれが氣に食はなくなつたんだね。馬鹿に興奮し出して、それがまた反對だと云ひ出すんだ」

「さうよ、女は」

「馬鹿を云へ」

「さうよ、さうよ。女は前でも、男よりもつと相手を思ふものよ」

「お前でもさうなら、何もお前の良人が下着を着ないのは、わざわざお前の不名譽を晒してやとらう思つてるなんて、そんな馬鹿な考への起らう筈がないぢやないか」

「下着と愛とはまた別よ」

「下着と愛なら、なほ更さうだ。男と云ふものは、細君が下着をこさへてくれなかつたら、下着なんか問題にはならないんだ。その問題にならない奴を、問題にし出すのが女なんだ」

「だつて、自分が下着を買ふお金を費つといて、下着をこさへなければいけないわと云ふと、下着を着せなけりや、お前が不名譽になるだけだつて云ふんでせう。だつて、誰にだつて聞いて御覽になるといいわ。そんなことを云はれて怒らない女なんて、ありやしないわ」

「所が、そんなことを聞いて、怒る男は有りやしないよ」

「だつて、自分が下着のお金を費つといて」

「いいよ、分つてるよ、男はそんなことなんか、問題ぢやないんだ」
 「だって、あたしには問題だわ。男はそんなときになると、自分の都合のいいことばかり云ひ出すんですもの」

「下着なんかして貰つたつて、して貰はなくつたつて、男には都合のいい悪いはないんだ。男はそんなときには、お前の上着の心配をしてゐるもんだ。それほど男は黙つてはゐるが、内心細君を愛してゐるんだ」

「内心なんか愛して貰つたつて、何の役にも立たないわ」と妹は云ふと、良人と喧嘩をしてゐるやうに、兄の前で膨れ出した。

兄は夕べの妻との喧嘩を、また新しく妹とやり出したやうであつた。彼は妹の氣持ちを静めるために二人にとつて共通の友人の話を始めた。

「俺は愛の話をしすと、Hの戀愛事件を不思議に思ひ出すんだが。Hは此の間わざ／＼戀人に逢ひに東京から福岡までいつたんださうだ」

「まア、Hさんに戀人がお有りだつたの」

「うむ、それが福岡の高等學校時代に、何んでもその娘の家に下宿をしてゐた。係かららしいんだが、それがHが東京の大學へ來てもまだ續いてゐたんだね」

「そりや、續くわ」

「そりや續くぢやないんだよ。それが續かなくなつたんだ。それでHはわざわざ戀人の心をたしかめに、福岡まで降りていつたんだ」

「まア」

「所が、福岡までいつたのは良いが、三百里を遠しとせずによちよち行つて、さて幾日間逢つたと云ふと、たつた半時間だつたと云ふんだ」

「駄目だつたの」

「駄目らしい。あの男のことだから、俺には何も云はないのだが、人から聞くとどうも自殺しさうで仕方がないと云ふんだ。俺も友人のことではあるし、あんな天才的な優れた男だから、殺しちや惜いし、内心やきもきして居る所なんだが、どうも此奴には困つたよ」

「あんな人を殺しちや、惜いわね」

「惜いよ、あんな優れた男は一寸ゐないんだが、女には分らないんだね。お前には分るか」

「また、女にはつて、仰言るのね、それだけは餘計だわ」

「だって、女には分らないさ。あの男を捨てる女があるかと思ふと、實際女全體が馬鹿に見えて來る、お前の仲間ぢやないか」

「でも、その女の人になつて、何か他にいやなことがあつたんでせう」

「いやなことはあるにはあるだらう。しかし、一時好きだつたことだけは確かだ。一時好きで後が嫌ひになると云ふのは、そりや。その嫌ひになつた方がいけないんだ。一時好きなら、好きな氣持ちは一時でも二時でも終生續き得るものなんだ。そこを續かさないと云ふのは、それは續かさなかつた女の方の、どこかに必ず馬鹿な所があつたんだ」

「だつて、男の方にも何か悪い所があつたのかも知れないわ」

「だいたい、東京からわざわざ福岡まで出かけて行ける男に、悪い男があると思ふか。さう云ふことを思ふのからして、もうお前は此の事件に對して、はつきりした考へを持つことが出来ない」と云ふことを示してゐるんだ」

「だつて、若い女ですもの、戀人が東京なんかには。心が變つたつて、不思議はないわ」
 「それはさう云ひたい所なんだ。しかし、さう云つちや、あの男を殺して了ふことになるんだ。お前なんか、男の一人や二人殺したつて、女ですもの、仕様がないわ、つて云つてゐられる女の一種さ。さう云ふ女にかかつちや、もつともかかる奴もかかる奴だが、お前の亭主も、あんまり賢い方ぢやないんだぜ」

「まあ、よくつてよ。あたしんとこのは、Hさんみたいに福岡あたりまで来てくれる氣遣ひな

んか、なくつてよ」

「それはお前が悪いのさ」

「ぢや、Hさんの戀人なんか、もう一つ悪いのね」

「悪い」と彼は云つた。

「ぢや、Hさんなんか、あたしん所より、もつと馬鹿ね」

「所が馬鹿もあそこまで行くと、もう馬鹿ぢやなくなるんだ。大愚賢聖に通ずと云つてね」

「ああ、むづかしくなつたのね」と妹は云ふと笑ひ出した。

その日、和子は家へ歸ると、良人の清盛の顔を見てくつくつ笑ひ出した。

「何を笑つてるんだ」と良人は云つた。

「あなたの顔を見てみると、をかしくつて仕様がないの」

「何ぜだ」

「大愚賢聖に通ずつて云ふ顔よ」

「兄貴にまた、馬鹿なことを習つて來たな」

「兄さんは、あなたを馬鹿だつて云つててよ」

「お前の兄貴なんか、いづれ碌なことは教へまい。だから、俺はお前があそこへ行つた日は、

「腹が立つて仕方がない」
 「あたしのやうな下らない女を、奥さんにした所が、あなたの馬鹿なんだつて」
 「そりや、さうだよ。兄貴はそんなことを云つたんかえ」
 「いえ」
 「お前の兄貴も、たまにはいいことを云ふことも、あるにはあるんだ」
 「だつて下着のことだつて、あたしを馬鹿だ馬鹿だつて云つてたわ、男は自分の下着のことよ、奥さんの上着の心配をしてゐるもんだつて」
 「そりや、定まつてるよ」
 「あなたも、さうなの」
 「そりや、さうだよ。俺なんか、お前の上着の心配どころぢやないんだ。お前の下着から帯か、何から何まで心配してゐるんだ」
 「だつて、さうならさうと、何ぜもつと早く仰言らなかつたの」
 「そんなことを云つたりしちや、面白くないぢやないか」
 「あら、まア、さうなの。兄さんもそんなことを云つて、あなたのことを賞めてたわ」
 「兄貴は、案外あれで分つた男なんだよ」
 「まア、いい氣になつてるのね」
 「たまには、いい氣にさせたつていいぢやないか」
 「さう云ふ所が、大愚賢聖に通ずつて云ふ顔なのね、どうして、男はさう馬鹿な顔ばかりしてゐんでせう」
 「何が馬鹿なことあるもんか」
 「だつて、あたしのやうな馬鹿な女に、虐められてゐる男なんて、どこか馬鹿な所があるに定まつてゐるわ」
 「さうだ、まア、俺に馬鹿な所があるなら、お前に虐められてゐる所だけだ。こゝは、あんまり賢くはないな。それは分つてゐるんだが、どうも、こゝの所はむづかしい。今に、俺は、お前ぐらゐ、何んでもなくなつて了ふか知れないんだ。さうしたら、占めたもんさ」
 「あなたのことだから、今にそんなことをなさりたくつて、仕様がないでせう」
 「そりや、分らぬさ」
 「まア、いいことよ。そんなら、あたしにだつて、覺悟はあるわ」
 「何の覺悟だ」
 「覺悟は覺悟よ。あなたから、自由になる覺悟」

「腹が立つて仕方がない」
 「あたしのやうな下らない女を、奥さんにした所が、あなたの馬鹿なんだつて」
 「そりや、さうだよ。兄貴はそんなことを云つたんかえ」
 「いえ」
 「お前の兄貴も、たまにはいいことを云ふことも、あるにはあるんだ」
 「だつて下着のことだつて、あたしを馬鹿だ馬鹿だつて云つてたわ、男は自分の下着のことよ、奥さんの上着の心配をしてゐるもんだつて」
 「そりや、定まつてるよ」
 「あなたも、さうなの」
 「そりや、さうだよ。俺なんか、お前の上着の心配どころぢやないんだ。お前の下着から帯か、何から何まで心配してゐるんだ」
 「だつて、さうならさうと、何ぜもつと早く仰言らなかつたの」
 「そんなことを云つたりしちや、面白くないぢやないか」
 「あら、まア、さうなの。兄さんもそんなことを云つて、あなたのことを賞めてたわ」
 「兄貴は、案外あれで分つた男なんだよ」

「そんな覺悟はしてもらはなくつたつて、下着でも造る覺悟をしてゐてくれ」
 「いやよ。あなたが、そんな覺悟を持つてらつしやると分つてみれば、もうあたしだつて、自由だわ。ね、いいでせう。あたし、あたしの思ふやうにしましてよ」
 「いけない」

「だつて、あなたにそんなことをされてからなら、癢に觸るわ」

「お前は、恐ろしい女だね」

「あなたは、恐ろしい男だわ」

「もう、こりや、俺とお前とは、駄目だ」

「さうだわ。駄目だわ。あたし、もう、無茶苦茶をしてやらう」

「俺も無茶苦茶をしてやるぞ」

「いいの、もうそんなことなんか」と、和子は云ふと、また喧嘩をし始めた。

兄と妹は結婚してから三年たつた。或る日、兄は妹の家へ遊びに行くと、妹は玄關にべたりと坐つたまま、ぼんやり外の方を眺めてゐた。

「何を考へてゐるんだ」と兄は云つた。

「どつかへ、遊びに行かうかと思つてゐた所なの。どうして」

「何んだか、あやしいぞ」

と兄は云ふと、部屋の中を嗅ぎつけるやうに歩き廻つた。

「ほんとよ、何んだか、此の頃、あたし自分でも怪しさうよ」

「さうだらう。どうも、お前の顔は、ひと通りの顔ぢやない」

「どんな顔をしてゐて。をかしいの」

「をかしい」

「實はあたし、困つたことが出來たのよ」

「ふむ」と兄は云つた。

「ふむぢやないわ。あたし、ほんとに困つちやつたわ」

「そんなことは、何んでもないもんだよ」

「何んでもないつて、兄さん、知らない癖に」

「分つてるさ」

「だつて、まだ誰にも云はないわ」

「お前のやることぐらゐ、分らぬ兄だと思つてゐるんだな。甘い奴だね」

「ぢや、云つてごらんさいよ」

妹は暫くびつくりしたやうに兄を見てゐた。
「お前は逢はなけりや、それでいいんだよ」
「兄さん、どうしてそんなこと、知つてらつしやるの？」
「だから、お前が甘いと云ふんだ。俺とお前とは、廿年一緒に棲んで喧嘩ばかりして來たんだぜ。お前の顔色を一目みれば、だいたい、何を考へてゐるかつてことぐらゐ直ぐ分るんだ」
「まア、いやになつちまふわ」
「あたつたらう」
「ええ、さうなの」
「それでどうした？」
「あたし、これから、ちよつと逢つて來やうかと思つてゐるの」
「よせ、下らない」
「だつて、向ふの人は、あんまり眞劍なんですもの」
「馬鹿な、そんなことは、眞劍に見えるに定つてゐるんだ」
「でもね、死ぬつて云ふのよ」
「死ぬなら、死なしとけばいいぢやないか」

「分つてゐるよ。云はなくつたつて」
「そんな豪さうな顔をして、ごまかさなくつたつて、いいわ」
「俺がごまかしてゐるんぢやないぢやないか、お前が云はないんぢやないか」
「ほんとに、あたし、どうしたらいいかしら」と妹は云ふと沈み出した。
「そりや、お前が悪いんだよ」
「まア、兄さんつて、何か事件が持ち上ると、あたしの故にして了解のよ。いいわ」
「だつて、お前の故だらう」
「そりや、あたしの悪いときは、あたしが悪いんだけど、何んでもかんでもあたしが悪いと思はれちや、立つ瀬がないわ」
「しかし、今度のそのことだつてお前が悪いのさ」
妹は黙つて兄の顔を睨んでゐた。
「さうだらう。お前が悪いんだらう」
「知らない」
「お前は、その男と逢はねばならぬやうなことを、前にしてあつたからだ。だから、そんなことになつて來たんだ」

「まさかぢやないんだ。そんなことで死ぬ奴なら、とうの昔に何んべんも死んでるよ」
 妹の行子は兄の前で、困つたやうに黙つてゐた。兄は部屋の中を歩きながら、二三年前に、福岡までわざわざ戀人の心を確かめに行つたHの話をおもひ出した。そのときHは戀人に捨てられて苦しまぎれに死にかかつた。
 「おい」と兄は云ふと、妹の方へ向き返つた。
 「何アに」
 「そのお前に逢ひたいと云ふ男はお前に良人があるのを知つてるんだらう」
 「そりや知つてるわ」
 「それぢや、お前も悪いが、そ奴も悪いよ。逢ふな逢ふな」
 「だつて、あたしに良人のあるのを知つて逢ひたいんだから、どんなにあたしを思つてるか分つてくれつて云ふのよ」
 「ははア、そこへお前がひつかかつたんだな」
 「ひつかかつたんぢやないわ」
 「ぢや、ひつかかりかけたのか」
 「まア、さう云ふ所ね」
 「さう云ふ所が、一番困りものなんだ。だいたい、良人のある女に、さう云ふ上手い文句を考へつた奴は、いつでもその手を使つてる奴なんだよ。何んだい、そ奴は」
 「活動に關係してる人よ」
 「活動も活動だが、何の活動だ」
 「何んだかんだせう」
 「そりや、面白い奴だなア、俺が女だつたら、さう云ふ奴に逢つて、ひとつぎやふんと云はしてやるんだが、お前ぢやね」
 「あたしはいつべん逢つてみて、それからしやうかと思つてゐたの」
 「それからしやうかつて、そりやいつたい、どう云ふ種類の量見なんだ。いつべん逢つて、それから瞞してやらうと云ふのかい」
 「そりや、まア、瞞してもいいし賞めてもいいわ。その時次第よ」
 「お前は何んだか、逢つてみるのか、楽しみなんだね」
 「さうよ。今の所、それだけだわ」
 「お前が楽しみぢや、問題にならないぢやないか」

「だつて、まさか」
 「まさかぢやないんだ。そんなことで死ぬ奴なら、とうの昔に何んべんも死んでるよ」
 妹の行子は兄の前で、困つたやうに黙つてゐた。兄は部屋の中を歩きながら、二三年前に、福岡までわざわざ戀人の心を確かめに行つたHの話をおもひ出した。そのときHは戀人に捨てられて苦しまぎれに死にかかつた。
 「おい」と兄は云ふと、妹の方へ向き返つた。
 「何アに」
 「そのお前に逢ひたいと云ふ男はお前に良人があるのを知つてるんだらう」
 「そりや知つてるわ」
 「それぢや、お前も悪いが、そ奴も悪いよ。逢ふな逢ふな」
 「だつて、あたしに良人のあるのを知つて逢ひたいんだから、どんなにあたしを思つてるか分つてくれつて云ふのよ」
 「ははア、そこへお前がひつかかつたんだな」
 「ひつかかつたんぢやないわ」
 「ぢや、ひつかかりかけたのか」

「だから、あたし、いつべん逢つてみやうかと考へてるの。面白いんですもの。だつて、ちよつと逢ふぐらゐなら、いいでせう」

「ちよつと、ちよつとと云つてると、そのちよつとが、いつの間にやらふくれ出すのさ」

「だつて、もうこんなことは、ないんですもの。たつたいつんべなら、いいでせう」

「俺はお前の良人ぢやないから、そんなこと知らないが、兄としてみると、どうもやくざな面白い妹を持たされたもんだと、あきらめるより仕方がない」

「それぢや、兄さんだつたら、どうなすつて、こんな場合に？」

「それは分らんね。俺でも、そんな場合になると、逢ふかも知れんさ」

「それ御覽なさいな、矢つ張り逢つてみたいんぢやありませんか」

「男と女とは違ふぢやないか」

「男だつて女だつて、こんな場合は同じことだわ」

「違ふよ、男が女に逢つたつて、世間は何んとも云やしないよ」

「世間が云はなくなつて、同じことだわ」

「そりや違ふ。世間なんて。男なんかどうだつていいんだ。世間が女を問題にすると云ふのは、それだけ女を大切にしてゐるからだ。女にめぢやをされちや、世間は憂なしたんだよ」

「そりや、ひどいわ。あんまりだわ」

「俺にそんなことを云つたつて、知るものか。世間に怒るがいい。あたし、男に逢ひたいときに、あんまりだわつて云つてみる。まア世間がどう云ふか」

兄は黙つてゐる妹の顔を見ると、云つた。

「お前は何んだか、その男に逢ひたくて仕方がないと見えるね」

「そんなに逢ひたいと云ふほどでもないの。ただね、どんなことをするもんか、ちよつと逢つてみたいのよ」

「それぢや、女たらしの色魔の方が、同じ逢ふからには面白いと思つてゐるんだろ」

「さうね、そんな人だつたら、なほいいわね。同じ逢ふからには、あたしん所みたいなお坊つちやんぢや、つまらないわ」

「お前はまだその男に逢つたことがないのかい」

「あるのよ、一度。だけど、そのときは澤山人がゐるたんですもの」

「ぢや、お坊つちやんかどうだか、見たら分るぢやないか」

「所が、あの人は、一寸見たつて分らないのよ。お坊つちやんらしくもあるし、さうでもなささうだし、そこがまたひとつは逢つて見たい所なの」

「だから、あたし、いつべん逢つてみやうかと考へてるの。面白いんですもの。だつて、ちよつと逢ふぐらゐなら、いいでせう」

「ちよつと、ちよつとと云つてると、そのちよつとが、いつの間にやらふくれ出すのさ」

「だつて、もうこんなことは、ないんですもの。たつたいつんべなら、いいでせう」

「俺はお前の良人ぢやないから、そんなこと知らないが、兄としてみると、どうもやくざな面白い妹を持たされたもんだと、あきらめるより仕方がない」

「それぢや、兄さんだつたら、どうなすつて、こんな場合に？」

「それは分らんね。俺でも、そんな場合になると、逢ふかも知れんさ」

「それ御覽なさいな、矢つ張り逢つてみたいんぢやありませんか」

「男と女とは違ふぢやないか」

「男だつて女だつて、こんな場合は同じことだわ」

「違ふよ、男が女に逢つたつて、世間は何んとも云やしないよ」

「世間が云はなくなつて、同じことだわ」

「そりや違ふ。世間なんて。男なんかどうだつていいんだ。世間が女を問題にすると云ふのは、それだけ女を大切にしてゐるからだ。女にめぢやをされちや、世間は憂なしたんだよ」

「そりや、ひどいわ。あんまりだわ」

「俺にそんなことを云つたつて、知るものか。世間に怒るがいい。あたし、男に逢ひたいときに、あんまりだわつて云つてみる。まア世間がどう云ふか」

兄は黙つてゐる妹の顔を見ると、云つた。

「お前は何んだか、その男に逢ひたくて仕方がないと見えるね」

「そんなに逢ひたいと云ふほどでもないの。ただね、どんなことをするもんか、ちよつと逢つてみたいのよ」

「それぢや、女たらしの色魔の方が、同じ逢ふからには面白いと思つてゐるんだろ」

「さうね、そんな人だつたら、なほいいわね。同じ逢ふからには、あたしん所みたいなお坊つちやんぢや、つまらないわ」

「お前はまだその男に逢つたことがないのかい」

「あるのよ、一度。だけど、そのときは澤山人がゐるたんですもの」

「ぢや、お坊つちやんかどうだか、見たら分るぢやないか」

「所が、あの人は、一寸見たつて分らないのよ。お坊つちやんらしくもあるし、さうでもなささうだし、そこがまたひとつは逢つて見たい所なの」

「俺の心配なんかして貰はなくつたつて、俺は俺で、ちやんとするよ。お前の方が、火がついてるんぢやないか」

「だつて、兄さんの方を聞いとかなくちや、参考にならないわ」

「さうだな、俺とこのも、俺より家内の方が、俺に飽きてるんぢやないのかな」

「ぢや、兄さんとも、油断大敵つて云ふ方ね」

「うむ、勿論、油断はいつでもしてゐないが、しかし、何んだか、急に俺もへんになつて来た」

「ぢや、早くお歸りなさいよ」

「俺を歸して、お前が逢ひに行かうつて云ふんだな」

「それはそれで、また別よ。あたしは兄さんの味方だから、お姉さんがあたしのやうな氣持ちにおなりになつたら、あたし、いやだわ」

「しかし、俺とこの奴も、お前のやうな氣持ちになつてやがるのかな」

「そりや、分らないわ」

「そりや、分らん。第一、お前とこのがそんなにぼんやりしてゐる所を見ると、俺も案外これでぼんやりしてゐるのかも分らんからな」

「さうよ、兄さんだつて、ぼんやりしてらつしやる所が、大ありだわ」

「お前もだいぶ、いかもの食ひだな」

「何んだか、そんな所もあるらしいのね」

「あるらしいぢやないよ。大ありだ。お前ん所のだつて、いかものぢやないのかい。見た所、大人しさうだが、どうも、いかものらしい所もある」

「そりやあつてよ、本格ぢやないわ」

「お前も大ぶ、お前へん所に、飽きてゐるんだね」

「さうよ。ちよつと飽きたわ」

「危ぶないことを云ふ奴だ」

「どうしたらいゝんでせう、こんなときは。あたし、なるだけ飽きないやうに注意してゐるんだけど、あたし、飽き出すととんとんと早いでせう」

「うむ、お前は早い」

「だから、あたし、自分ながら。ひやひやしてゐる所もあるの」

「さう云ふ飽つばい奴は、實際困り物だよ。何とか方法を變へないと、まだまだ此の先が長いんだから、危いぞ」

「兄さんなんか、どうなの。まだお姉さんにお飽きにならなくつて！」

で一緒に、ぐらぐらさ」

「こんなときには兄さんひとりでも、ちやんとしつかりしてゐて下さるといいのよ。さうでないと、誰に相談していいのかわらなくなつちまふわ」

「俺はこれでも、しつかりだけはしてるんだよ。たまた相手がぐらぐらし出すから、こちらたつてぐらぐらすのさ。夫婦つて云ふものは、一方だけしつかりしてゐて片ツ方がぐらぐらしてゐるつて云ふことは有り得ないからね。だいたい夫婦つて云ふものは、二人から出来上つてはゐると云ふものの、實は一つのものなんだ。だから、自分がぐらつき出したと云ふことは、夫婦がぐらつき出したと云ふことだ」

「ぢや、世間の夫婦なんて、随分いい加減のものだわね」

「子供の出来るまでは、相當いい加減のものらしい。所でお前はまだかい。どうしたんだ」

「あたし？ あたしなんか、子供は大嫌ひよ」

「子供が嫌ひなら、そりやもう、助からない」

「さうかしら！」

「そりや、さうだよ。子供の嫌ひな奴は、いつまでたつたつて幸福なんかありやしない」

「よどうして？」

「へんに嚇かすなよ。俺だつて、家内に逃げられたりしちや、まアまア、氣樂だとは云ふもの、あんまり格好のいいもんぢやないからな」

兄は妹の顔をつくづく眺めながら、云つた。

「良人に飽くと、女はそんな顔になるもんかい。お前も大ぶ、變つたぞ」

「さう、變つて、どんな風なの？」

「何んだか、觸りが、ぐらぐらしてるよ。希望がないね。つまり、張りがないのかな」

「ぢや、お姉さまも、さうだわ、何んだかぐらぐらしてゐらつしてよ」

「所が、俺だつて、いい加減にぐらぐらしてるのさ」

「ぢや、あたし所のもの、さうかしら」

「そりや、さうさ。お前がぐらぐらして來たと云ふのは、お前んとこのもぐらつき出したと云ふ證據なんだよ」

「ぢや、みんな、ぐらぐら、ぐらぐら、してるのね」

「どうも、さうらしい。これぢや今に一人ぐらゐる。潰れるね」

「何とかこんなときに、しつかりする藥なんか、ないものか知ら」

「そりやない。誰か一人犠牲になつて潰れたら、そしたらみんな、びつくりするんだ。それま

「だから、犬みたいだつて云ふのよ」
 「いいぢやないか、犬だつて」
 「いやよ、ころころお腹の中から人が出て来るなんて、いやらしいわ」
 「馬鹿だね」と兄は云ふと、苦笑した。
 妹の危険期を知ると、兄はそれが自分の妻の危険期だと気がついた。これは彼にとつては不幸であつた。
 「おい、妹の奴が、一寸、をかしい」ぞと彼は妻に云つてみた。
 「をかしいつて、どう？」
 妻は彼の云ふことが分らないのか、別段意に介せぬやうに聞き返した。
 「お前には、まだ分らないのか」
 「だつて、をかしいだけでは、何の事だか分らないわ」
 「それなら、いいんだ」
 「何がいいの」
 「まア、さう追窮して来るな。追窮されると、俺は何んだか、だんだん白状しさうな気がするんだ」

「どうしてつて、夫婦で云ふものは、子供を産まなくちや、いつまでたつたつて水の出で来ないポンプみたいぢやないか」
 「だつて、子供なんか産むくらゐなら、初めから夫婦になんかなるもんですか」
 「それぢや、もつたいない、結婚なんかしなけりやいいんだ」
 「ほんとに、もつたいないわ。これぢや」
 「しかし、お前が子供を産まなけりや、お前の良人が代りに産むつて云ふわけにや、いかないんだぜ。こいつだけは、女ぢやなけりや、出来つこないんだからな。それをやらないなんて、もつたなくなつて、今に罰があたるに定つてゐる」
 「さうかしら。罰があたるかしら」
 「そりや、考へたつて分るぢやないか。昔から、子供を産まない夫婦で、罰のあたらないものなんてありやしないんだ」
 「いやアね、罰なんかあつたら」
 「それぢや、子供を産めばいいぢやないか」
 「だつて、子供なんか産んだりしちや、犬みたいだわ」
 「犬だつて、猫だつて、子供を産むんぢやないか」

「お前が逢つてたんぢやないか」
 「あたしが、誰と逢つたの！」
 「そんなことは、お前が知つてるだらう」
 「あたし、外へなんか出たことが、ありますか」
 「だから、なほ逢ひたいんだらう」
 「いやな方ね、いつたい、あたしが誰と逢ふの」
 「ぢや、俺が、誰と逢ふんだ」
 「あなたは、始終外へばかり出たがつてゐらつしやるんですもの、誰と逢つてるか、知れたもんですか」
 「いつたい、俺が誰と逢ふと云ふんだ」
 「ぢや、白状すると仰言つたことを白状なさいよ」
 「俺の白状すると云つたのは、お前のことだ」
 「嘘だわ、嘘だわ」
 「聞かない先に、嘘だか本當だか、分らないぢやないか。俺は妹の奴が、危くなつてゐるか、お前もひよつとしたら、と思つたんさ」

「まア、そんな、白状しなきゃならないやうな、そんなことがおありになつたの」
 「うむ、あるんだ」
 「いやだ、どんな、どんなこと」
 妻の眼は急に光り出した。
 「どうも、お前の前では、云ひにくいよ」
 「ぢや、やつぱり、さうなんだわ」
 「何がさうだ」
 「あなたは、あたしに、何んだか隠してゐらつしやると思つてゐただけど、いいわ」
 「お前が俺に、隠してゐるんぢやないか」
 「あなたよ」
 「お前だ」
 「あなたは、近頃は夜も良くお眠みにならないし、御飯だつて、ろくろくお上りにならないし、：：それで分つたわ」
 「何んだ、馬鹿馬鹿しい。俺がお前を疑つてゐるときに、お前が俺を疑つてやがる」
 「ちがふわ。あなたは始終、誰かと逢つてらつしやつたのよ」

「まあ、行きさんが？」

「行きさんぢやないよ。お前だ」

「あたしが、どうしたの？」

「お前も危くなつてる頃ぢやないのか」

「行きさんが危くおなりになつたからつて、あたしまで危くなるものなの」

「そんな理窟は、入らぬときだ」

「あたしは、あなたが行きさんと兄妹だと思ふと、何んだかいやよ」

「何ぜだ」

「そんな危い人の兄なんて、信用出来ないわ」

「ぢや、何んだな、俺が、行き子の兄だと云ふので、今度はお前が危くなつて来たと言ふんだな」

「さうよ。あたしも、危いわ」

「宜しい」と彼は云つた。「ぢや、俺も、今に危くなつてやらう」

パラソルを廻しながら、妹がやつて来た。兄は妹の晴れやかな顔を見ると、危険期も過ぎた
 思ふと思つた。すると、もういつもの癖で、冗談が云ひたくなつた。

「おい、危険期」

「何アに」

「どうだ、その後」

「それが、全く面白くなつたのよ」

「どう云ふ具合に、面白くなつたんだ」

「どう云ふ具合につて、そんなことを云つたりしちや、兄さんなんか、眼を廻しちやふわ」
 妹は庭を眺めながら、くすくす笑ひ出した。

「ひとつ、眼でも廻してくれよ。一向、面白くないことばかりで、へこたれてる所なんだ」

「あの活動に關係してゐるつて云ふ人ね」

「うむ」

「あの人よ」

「あれが活動したのかい」

「さう」

「ぢや、大ぶ、活動の眞似でもやつたんだろ」

「さうなの。そりや面白い人なのよ。あたしと話をしてみたら、テーブルの下で、粹きに足を
 きゅつきゅつと踏むんでせう」

「ふむ」

「それで、あたしぎゅツと踏み返してやったのよ。そしたら、もうあたしをいやだつて云ひ出すの」

「ぢや、もう危険期も過ぎたのかい」

「だつて、もう、足で踏んぢやつたんですもの」

「そりやうまい」

「所が、あたし、その足で直ぐ家へ歸つたら、またあたしん所のがあたしにぺこぺこし出すのよ。もう、あたし、いい加減にいやになつちやつた」

「どうも、女と云ふ奴は、それで困る」

「ほんとよ女つて、どうしてこんなものなんかしら、あたし、自分ながら、あきれれるわ」

「俺も、女と云ふ奴には、大ぶあきれて来たんだが、お前にいたつては、あきれ返るより仕様ががない」

「それであたし、またあきれれるやうなことをやったのよ」

「何んだ」

「今度は銀行の會社員」

「またか」

「さうなの」

「ひどい奴だな」

「だつて、仕様がないわ。向ふだつて、仕様のないやうなことを、云ふんですもの。うまいわね、男つて云ふものは」

「今度は男の攻撃か」

「さうよ、男つて、良人があると分つてゐても、勇敢なんですもの。ほんとに油斷がならないわ」

「所が、俺のやうな男もあるんだから、まア、さう云ふな」

「兄さんだつて、あたし、どうか分つたもんぢやないと思ひ出してるのよ」

「馬鹿を云へ。俺は人の家庭を亂すやうなことは、大い嫌ひなんだ。これは俺の持つて生れた思想なんだ」

「銀行の會社員も、初めはそんなことを云つてたわ。僕があなたを愛するのは、これは大きな愛で、あなたの良人に迷惑はかけないなんて」

「やつぱり、そ奴もそんなことを云つたかい」

「ほんとに、危いのよ」
 「覺悟はあるのか」
 「覺悟なんか、ありやしないわ」
 「それぢや、困るぢやないか」
 「困るのは困るけど、そんなことなんか、もう考へてゐられないわ」
 「その男は、ほんとにお前を愛してゐるのか」
 「口では、そりや、愛してゐるつて云つてるのよ。だけど、口だけだから、何んだか、あたしの方が急に愛し出したのかも知れないわ」
 「ぢや、何んだな、その男よりお前の方が愛してゐるのか」
 「今の處はさうらしいの」
 「ぢや、ほんとに向ふも愛して來る見込みはあるんだな」
 「あたしは、あると思ふのよ」
 「今なら、まだお前は後へ引けるだけの力はあるのかい」
 「さうね。引いて見なきやア、分らないけど。多分あると思ふわ」
 「ぢや、まだ危くはなつてゐないんだな」

「ええ、云つてよ。だから、あたし立派なことは、もういつも兄から聞いてゐますわ、つて云つてやつたの」
 「どこにもここにも、暇人ばかり揃つてやがる」と兄は云ふと、不潔なものを見るやうに、急に顔を曇めて黙り出した。
 兄は云つた。
 「いつたい、お前はその銀行員を、愛してゐるのかい」
 「それが、初めは、いつもの調子だつたのよ。所が、急にむらむらツと好きになつちやつたの」
 妹は片手で胸を壓へると、この胸がと云ふかのやうに、
 「どうしたらいゝんでせう。あたし、初めはちつともさうぢやなかつたの。だけど、をかしたもんだわね。これぢや、油断も隙もならないわ」
 「何を云つてるんだ」と兄は叱つた。
 「だつて、あたしは、隠してなんか、置けない性質なんですもの」
 「ぢや、その男にも、もうそんなことを云つたのかい」
 「云つたわ」
 「そりや、危い」

「そりや、そこまでは、まだなかなかよ」

「それぢや、俺が、ぶち壊してやらう」

「いやよ」と妹は云ふと、兄を叩く眞似をして笑ひ出した。

「いや、今ぶち壊さなけりや、後が厄介だ」

「いやいや、あたし、あの人、好きなんですもの」

「駄目だ」と兄は強く云つた。

「どうして」

「良人があるのに、他の男が好きだなんて、俺はそんなこと嫌ひだ」

「兄さんが嫌ひだつて、あたしが好きならいいぢやありませんか」

「俺は嫌ひだから、ぶち壊すのだ」

「それなら、あたし、もつと好きになつてよ」

「冗談はよせ、こちらがひやひやしてゐるときに、いゝ加減に大人しくしたつて、いいぢやないか」

「だつて、そんなことに、いちいち干渉されちや、やりきれないわ」

「ぢや、お前へん所のに、云つて了へ。お前が云へなきア、俺が代つて、あやまつてやる」

「そんなことなんか、あたし、初めから云つてあるのよ。隠してなんか、誰が今頃やるもんですか」

「そしたら、何と云つた」

「初めは黙つてゐたけど、俺はお前を愛してゐるから、そんなことぐらゐ、何んでもないつて云つたわ」

「ほんとか」

「ええ、ほんとよ」

「お前ん所の亭主は、嘘つきだ」彼は怒鳴つた。

妻が他の男に愛情を感じ出し、良人がそれを、妻を愛してゐるが故に平氣だと公言するにいたつては、——兄は腹が立つて來た。

彼は妹の顔を見詰めながら、鋭い語調でつめ合つた。

「お前へん所の奴は、馬鹿も馬鹿だが、その馬鹿だけは、使ひ道のない馬鹿だ」

「だつて、あれは、あんなやつですもの」

と妹は云ふと、兄とは反對に暢氣になつて身體をぐらぐら揺すり出した。

兄は云つた。

「それぢや、俺はもう相手にしないから、お前はどしどし、お前の良人を苦しめてやるが良い。もつとお前はその銀行員と云ふ奴を愛してやれ」

「ええ、あたし、さうするわ」

「さうし出すと、お前ん所のは、他の女に遊蕩し出すに定つてゐるし、お前はお前で跣足になるし、俺は見えてゐるのに面白くなつて来る」

「もう直きに競争ね」

「さうだ、もうそこまでいけば、甘いことなんか云つてる奴が、負けるんだ」

「したらあたし、自棄になつてやるわ」

「お前なんか、どうなつたつて、いいんだよ」

「あたしはそしたら、どんな風になるかしら」

「お前はその銀行員と云ふ奴と結婚するか、捨てられるか、とにかく、どつちへ轉んだつて、また直ぐ他の男が好きになるに定つてゐるんだ」

「そんなものかしら、あたしは」

「お前はさうだよ。だいたいお前は浮氣者で、根の生えた奴ぢやないよ」

「子供みたいね、あたしは」

「お前は俺の云ふことに、感心してゐるんだな」

「兄さんは昔からあたしを、感心させて了ふのが上手よ。うっかり聞いてゐるやうもんなら、

でもいつの間やら、本當になつて了ふんですもの」

「所が今度のこと、本當になるぞ。俺は今に、お前へん所のもおだててやつて、他に女をこさへるやうに仕向けてやる」

「かまはないわ。あんな人」

「かまはなけりや、いいぢやないか。お前とこのだつて、お前のやうな女を細君にしてゐるぢや、いつまでたつたつて可哀想だよ。お前が俺の妹なら、お前へん所のは俺の弟だ。さうさう

お前ばかり可愛がつてはゐられないんだ」

「いやに嚇かすわね、今日は」

「生意氣云ふな」

「だつて、あたしだつてさう云はれちや、少々は腹が立つのよ。これでも、少しぐらゐは、良人思ひの所があるんですもの」

「良人思ひの所があるなら、もう少し考へたつて良ささうなもんだ」

「そりや、考へるには考へてよ。だけど、あたしのは良人は良人として、ちやんと立派に定め

といて、それからこちらは、こちらで別にしようつて云ふ腹なのよ。つまり、ちよつと、新し
いんだわ」

「何を云つてるんだ」

「どうして」

「馬鹿なことを云ふのは止せ」

「だつて、良人は良人として、ちやんとしとけばいいぢやありませんか」

「どこにそれでちやんとしてるんだ」

「ちやんとしてるぢやありませんか」

「良人を踏みつけといて、それでちやんとしてるのなら、そりや、ちやんとしてる」

「良人をうまく納得させて、そして、かう云ふ風にもちやんとしてゐるのは、なかなかこれで、

難しいことなのよ」

「今度は俺に説教するのか」と兄は云ふと笑ひ出した。

妹は兄を見ると、皮肉な微笑をもらして云つた。

「だつて、兄さんなんかお、姉さんを後生大事に大切に、それでもお姉さんからいつ飽か
れるかしらと思つて、ひやひやしてゐらつしやるんでせう。そんなことはそんなに難かしいこ

とぢやないことよ。それより、あたしみたいにな、良人をべこべこさせといて、こつちはこつち
で、他にちよつと、と云ふ方が難かしいのよ」

兄は言葉が云へなかつた。が、いつの間にか、妹がそこまで生活の理窟を編み出したかと

思ふと、内心では、此奴と、思つてにやりとした。

これでは多分、いくら獨り荒野へ飛び立たせても、案外強い風でも切り抜けて行くにちがひ
ないと彼は思つた。彼は今までは打つて變つた柔かい氣持ちになると云つた。

「お前はお前で、何か俺とは別な考へがあるらしい。まアやつてみるさ。俺は、もう知らない」

「あたし、實は兄さんからさう云はれるのが、一番恐いのよ。あたし、兄さんみたいな人と結
婚してたら、そりや、困つたにちがひないわ」

「何ぜだ」と彼は云つた。

「だつて、さつきあたしに怒つたと思つたら、がらりと變るんですもの、さつぱり分らないわ」

「ははア、お前には何んだな、男のかう云ふ所が恐いんだな」

「さうよ、そんな所が、あたし好きだわ」

「ぢや、その銀行員と云ふのも、そんな所があるのかい」

「ないわ、そんなもの。いづれあの人とも、あたし、駄目なのは定つてゐてよ。ただちよつと、

暇潰しには、まアあの頃が手頃なのね」

「何んだ、そんな所か」

「さうよ、あんなもの」

「お前は、ちよつと、毒婦の傾向を持つてるね」

「さうかも知れないわね。そりや好きなのは、好きなのよ。あの銀行員だつて、そりや可愛い所があるんですもの」

「それぢや、心配はいらないんだね」

「あたしを心配してゐて下すつたの」

「うむ、そりや、ちよつとは心配してゐたさ」

「お氣の毒だわ。あたしのことなんか心配してゐて下すつちや、此の先どんな心配をかけるか知れないわ」

「まだ心配をかけるつもりか」

「そりや、かけてよ。兄さんだつて、少しくらゐ、あたしに心配をさせなさいよ。まだあたし、兄さんの心配なんか、一度だつてしたことがないんですもの、あたし兄さんのことだつたら、何んでもしてよ」

「そりや、有り難いが、俺もお前に心配をさせるやうぢや、お了ひだよ」

「兄さんは、ほんとに、道徳堅固つて云ふ方ね」

「うむ、お前とは反對だ」

「お姉さんなんか、お幸せか何んだか、分らないわ」

「所が、あ奴は、俺がこれほど大人しくしてゐても、まだいけないと見えるんだ」

「そりや、そんなものよ、ぢつとどつちもしてゐると、味が細かくなつていくんですもの」

「お前の方は、大味と云ふ方かい」

「さう。大味よ。逃げたり走つたり、大ぶ違つてるわ。狂人ひにならないだけ、この方が得なのよ」兄は妹の潑刺とした顔を眺めながら、いつたい二人のどつちが豪いのかと考へ出した。降り續いた梅雨が上ると、青葉の影から新鮮な麥藁帽がちらつき出した。和郎は旅行がしたくなつた。

さう云ふ或る日、また妹がぶらりと來た。

「兄さん、とうとう、けりをつけちやつたの」

「何のけりだ」

「あたしん所のと」

「喧嘩をしたのか」

「喧嘩どころぢやなくつてよ」

「ぢや、別れたのかい」

「ええ、さう」

兄は黙つて妹の顔を眺めてゐた。

「びつくりなすつて」

「びつくり所ぢや、ないぢやないか」

「何んでもないわ」

妹は足袋でも捨てて、來たやうに、けろりとして笑つてゐた。彼は云つた。

「お前はそれで、後悔なんかしてゐないのか」

「そんなこと、するもんですか」

「お前はそれで、いいと思ふのか」

「いいも悪いもないわ。初めからかうなのよ。あんな人と一緒にゐちや、兄さんに心配かけるばかりだわ」

「いつたい、どうしたと云ふんだい」

「どうもかうもないの。あたし、例のあの銀行員と一緒に散歩してたのよ。そしたら、あたしん所のがそれを見つけて、道徳に反してゐるつて云ふんですもの」

「そりや、道徳に反してゐるさ。俺だつて嫌ひだよ」

「そんなことは、分つてゐるわ。だけど、道徳に反するやうなことを、あたしにさせるのが、

いけないんだわ」

「そりや、反するものが悪いんだ」

「だつて、良人は良人らしく、道徳に反させないやうにするべきですよ」

「誰が、自分の家内に、悪いことをさせたい奴があるものか」

「だつて、あの人があたしに好かれるやうにさへしてゐれば、あたしだつて、何も道徳に反す

るやうなことは、しなくつたつてすませたのよ」

「もう、さうなれば、しやうがない」

「さうよ。あの人が悪いのよ」

「冗談は、今だけはよしてくれ」

「だつて、そりや、あたしが悪いのは、重々あたし知つててよ。だけど、あの人だつて、あた

しにあんなことをさせといて、あたしを悪い悪いとばかりはいへないわ」

「阿奴も阿奴だ」
 「さうよ」
 「お前もお前だ」
 「あたし、もういいの。ただね、あたし、兄さんに叱られるのだけが、實はちよつと恐かつたのよ」
 「俺はお前のやうな奴には、相手にならぬよ」
 「いやよ。そんなこといつたりしちや」
 「俺は知らん」
 「だつて、あたし、仕様がなぢやありませんか」
 「お前なんか、俺の家へは来てくれるな」
 「いいわ」
 兄は泣いてゐる妹を眺めながら、いつたい此の問題は捨てておくべきかどうかと迷ひ出した。彼は云つた。
 「おい、お前は、それで、もう歸つて行く氣は少しもないのか」
 「ないわ」

「ぢや、これから先きをどうしていくつもりだ」
 「それであたし、兄さんに相談に来たんぢやありませんか」
 「ぢや、お前は、俺の云ふ通りにするつもりか」
 「ええ、するわ」
 「それぢや、もう一度、お前ん所へ歸るがいい」
 「いや」
 「いやでも歸れ」
 「だつて、歸れたつて。前と同じことなんですもの」
 「それは違ふ」
 「違ひやしないわ」
 「いつたい、物事と云ふものは、同じことが二度あるもんぢやないんだ。昨日と今日とは違ふんだ」
 「同じことだわ」
 「さう思ふのは、昔ものは、昔もの考へ方だ」
 「昔ものだつて、今だつて、同じことは同じことだわ」

「さう思ふのが昔もんだ。お前にもし新しい所がちよつとでもあるのなら、よくそこん所を考へてみるがいい。いつたい、同じ出来事が二つあると云ふことは絶対にあり得ないことだ」

「だつて、あたしん所のも、あたしも、いつまでたつたつて、變りつこはないことよ」

「それならもう一度歸つてみる、きつと違ふ。お前だつて、お前ん所のだつて。もし違つてゐなきア、そりや、人間ぢやないんだ」

「だつて、違つてゐたつて、違ひ方は分つてゐるわ」

「いや、違ふ。もしお前が物事と云ふものを、同じ物でもどこか昨日と今日とは違つてゐると考へたら、さう考へ出したと云ふことで、初めて違つてゐる所か分つていくんだ。そこをうかうか氣がつかずに、いつでも似たことを同じことだと思つてゐたら、いつまでたつたつて、人間は樂みなんかありやしないんだ」

「あたしには、初めから樂みなんてなくつてよ」

「それは結局、馬鹿だからだ。だいたい、夫婦生活をしてゐるもので、毎日毎日同じことばかりやつてゐると思ひ出したら、もうその夫婦は駄目な徴だ。毎日毎日違つていくんだ、と思はなきア」

「だつて、同じことは同じことだわ」

「それが違ふんだつて。いくら云つても分らない奴だな。神さんは人間に二つと同じ出来事を與へはしないのだ。それが分らん奴は、罰があたつて、不道德なことをやらかすんだ」

「だつて、不道德だつて、その人に良ければ、罰にも何んにもならないわ」

「罰は自分に來なけりや、子供に來る」

「あたし、子供なんか、産まないわ」

「子供を産まなきア、罰はその者に來るに定まつてゐるんだ」

「どうして來るの」

「年が寄つたら、どうするんだ」

「兄さんの話は、恐くつていやよ」

「これは俺が云つてゐると思つたら、間違ひだぞ」

「ぢや、神さんが云つてゐるの」

「さうだ。神さんだ、一人の人間が不幸にならうと云ふときには、必ず傍の善良な心のは、いいことを云ふに定つてゐるんだ」

妹は笑ひながら兄に云つた。

「ぢや、あたし、歸つてよ。その代り、あたしが不幸になつたら、兄さんよ」

「よろし。そのときは、俺が何もかも引き受けてやる」

「ぢや、あたし、不幸になつて、さんざん兄さんを虐めてやるわよ。よくつて」

「うむ、いい。お前が俺の云ふままになつて歸るなら、俺はそれだけの責任を持つてやる」

「頼母しい兄さんね」

「うむ」

「だから、あたし、好きだと云ふのよ」

「お前は、人に責任を持たすことだけが、昔から好きな奴だつたんだ」

「まア、それはそれとして、ぢや、あたしほんとに歸らうかしら」

「歸れ、直ぐ歸れ。お前へん所のは、心配してるに定つてるんだ」

「そりや、心配してゐるわ」

「そんなら、もつと早く歸ればいいぢやないか」

「それが、どうも困つたことに、あの人のいけない所なの。あの人は昔から、あたしが心配させる、ぺこぺこしてあたしを餘計に大事にするの」

「それでか、お前の不行儀なのは」

「さうよ。だから、あの人がいけないんだわ。あたしはもつと、びしびしやられなければ、駄

目なのよ。あの人のあの甘さは、まアちよつとお砂糖ね」

「そんなに、お前へん所のは甘いのかい」

「えゝ、えゝ、だから、あたし、びしやびしや頭を叩いてやるの。今日だつて歸つたら、もう眼に見えてるわ」

「人間は辛くなつたつて、仕様がなないんだ。初めの間は、甘いのが好きで、それからだんだん甘いのを馬鹿にし出す。所が、甘いのを馬鹿にするのは、まだまだ至つてゐない證據なんだ」

「あたし、あたしん所のに甘くされると、よく兄さんのことを思ひ出すわ。兄さんも、今頃はお姉さんに、きつとこんなんだらうと思ふのよ」

「下らぬことを云ふより、早く歸れ」

「ああ、さうさう。あたし、また歸らなキアならなかつたんだわね」と妹は云ふと、立ち上つた。

兄は妹が不行儀をしたそれだけ、彼女の良人に謝罪しなければならぬと思つたので、妹と一緒に彼女の家まで出かけることにした。

「あら、兄さんも行つて下さるの」

「定まつてるぢやないか、お前が悪事を働いて、俺が黙つてゐられるかい」

「うむ」
 「お姉さんに宜敷くね」
 「うむ」
 「また来てよ」
 「うむ」
 「ぢや、あやまつてやらうと仰言るの」
 「うむ、あやまる」
 「いやよ、兄さんは豪さうな顔をしてらつしやればそれでいいのよ」
 「馬鹿を云へ」
 兄はさつさと出ていった。妹は
 「いやだ、いやだ」と云ひながら、兄の後からついて出た。
 「兄さん、ほんとに歸つて頂戴」
 「お前と俺とは違ふんだ」
 「だつて、夫婦喧嘩ぢやないの」
 「所が、此の夫婦喧嘩は俺があやまらなければならん夫婦喧嘩だ」
 「駄目よ、兄さんがあつしやつてわ」
 「なぜ駄目だ」
 「だつて、仲直りをするところなんか、兄さんに見られては、あたし死んでよ」
 「ははア」と兄は云つた。
 「さうよ、だから、歸つて頂戴つて」
 「ぢや、歸らう」と兄は云ふと立ち停つた。
 「さやうなら」
 「うむ」
 「また来てよ」
 「うむ」
 「お姉さんに宜敷くね」
 「うむ」
 兄はくろりと向ふを向いた妹の後姿を眺めると今日は一つ、抜手を切つて爽快に海を泳いでやらうと考へた。

「ぢや、あやまつてやらうと仰言るの」
 「うむ、あやまる」
 「いやよ、兄さんは豪さうな顔をしてらつしやればそれでいいのよ」
 「馬鹿を云へ」
 兄はさつさと出ていった。妹は
 「いやだ、いやだ」と云ひながら、兄の後からついて出た。
 「兄さん、ほんとに歸つて頂戴」
 「お前と俺とは違ふんだ」
 「だつて、夫婦喧嘩ぢやないの」
 「所が、此の夫婦喧嘩は俺があやまらなければならん夫婦喧嘩だ」
 「駄目よ、兄さんがあつしやつてわ」
 「なぜ駄目だ」
 「だつて、仲直りをするところなんか、兄さんに見られては、あたし死んでよ」
 「ははア」と兄は云つた。
 「さうよ、だから、歸つて頂戴つて」

名
月

石川五右衛門は弟子の小兵衛を連れて木輦の間道を歩いてゐた。彼はその夜ひどく上機嫌と見えて、鼻で謠曲をうなりながら、時々手拍子とつてばちばち自分の頬を叩いてゐた。弟子はその後から月の光りの中で踊つてゐる五右衛門の姿を眺めてゐた。すると突然五右衛門はぼつたり謠曲をやめたと思ふと、ひらりひらりと體を左右にかはし出した。弟子は謠曲の面白が初めて分つたと云ふ顔つきで、ぼんやり師の左右に跳ねる腰の運動を眺めてゐた。すると五右衛門の運動はますます激しくなつて來た。と、彼は路傍に廻つてゐた水車の上へ飛び上ると、青ざめた栗鼠のやうにその上を馳け出した。

弟子には、これが五右衛門の持病だと云ふことに氣附かなかつた。五右衛門は前から名月の夜になると、突然幻覺に襲はれて人を斬り殺す發作がある。暫く弟子は師の素早く動く足先と、飛沫を噴いて急速に廻轉し出した水車の羽根とを眺めてゐた。が、五右衛門はいつまでた

つても、水車の上から降りやうとする様子がない。
 そこで、初めは師の優れた技倆に打たれてゐた弟子も、漸くこれは謡曲でないことだけは事實であると認め出した。

「先生」と彼は聲をかけた。

すると五右衛門の身體は風呂敷のやうに草の上へ落ちて来た。

弟子は周章して師の傍に馳け寄つた。五右衛門は水に濡れた顔を上げて弟子の顔を眺めてゐた。が、起き上ると、前とは變つて不機嫌な顔をして歩き出した。

二人の前に伏見がだんだん近かづいた。竹藪の中に射し込んだ月の光の中、時々狐が立ち上つたまま、二人の方を向いてゐた。後の方で何か嘖みつく音がする。五右衛門は刀に手をかけて振り向くと、弟子の小兵衛が嘔潰しに野柿を嚙つて歩いてゐた。

「小兵衛」と五右衛門は云つた。

「はい」

「俺の脊中を斬つてくれ」

「何と仰言います」

「俺の脊中に、一太刀あびせてくれと云ふのだ」

「先生は今夜はちとお飲み過ぎなさいましたが、さつき水車の上をお馳けになつたときだけはびつくりいたしました」

「お前には、あの流れて来た太刀がまだ見えぬわ」と五右衛門は不愉快さうに云つた。

「太刀が流れて来たのでございますか」

「さうだ。俺は今夜は、一太刀も受け損じはしなかつたが、よほど俺も近頃は弱つて来たのに氣が附いた」

「それで、私が先生のお脊中を斬つてみるのでございますか」

「うむ、俺はお前の刀がどれだけ見えるか、一度試してみたいのだ。敵の抜く手は直ぐ見えるが、味方の抜く手はまだ、俺には見えぬのだ」

五右衛門は小兵衛の顔をぢろりと見ながら、

「良いか、俺の知らぬ間に、抜くのぞ」と云つてまた歩いた。

小兵衛は柿を捨てると、冗談のつもりで、刀の柄に手をかけながら、師の後からにやにや突つて歩いていった。

「おい、小兵衛」と五右衛門はまた云つた。

「はい」

「お前は俺を斬らうと云ふのに、お前の出す足は俺の足と違つてゐるではないか。それに、お前の足音は笑つてゐる」

「はい。恐れ入りました」

小兵衛は足を踏み變へると、口をひき緊めて歩き出した。が、師に油斷をさすために、何か一言、押揃つてみたくなると、彼は暢氣な聲で云つた。

「先生、今夜の水車は、眼の廻るほど早く廻りましたが、あれで大ぶん米が白くなりましたでございませうね」

「お前はなかなか賢い奴ぢや。だが、まだまだそれでは危いぞ」と、五右衛門は云つたかと思ふと、急に立ち停つた。

小兵衛の脇腹に師の鞘がぐツと當つた。小兵衛は腹を壓へたまま、顔を顰めて立ち停つた。が、漸く聲だけは立てずに済ませると、小聲で云つた。

「先生、手ひどいことだけは、もうどうぞ」

「よしよし、だが、こちらに隙を造らさうとすると、そちらに隙が出来て来る。良いか」

「はい」

「俺はこれでも、まだお前の心はすつかり見えるわ。だが、小兵衛、覺悟は良いのう」

「何の覺悟でございます」

「覺悟は覺悟だ。俺は今夜は、今に亂心するにちがひない。すればお前の命も危いぞ」

「先生」と云つた小兵衛の聲は慄へて來た。

「お前は逃げやうとしてゐるな。逃げればお前の足は動かぬぞ」

「先生」

「ははア、またお前は俺を殺さうとして來たな」

「先生、そんなことは、もう仰言らずにゐて下さい」

「よしよし。さア、來い」

また二人は暫く黙つて歩いていつた。が、小兵衛は、自分の心が手にとるやうに師の脊中に映つてゐるのだと思ふと、自分の心の上一下の進退が、まるで人の心のやうに思へて來た。

「先生」

「何だ」

「私はもう恐くて歩けなくなりました」

「馬鹿な奴だ。お前は俺を殺せば良いのだ。ただ殺せ。遠慮は入らぬ。俺はいつれ、近々太閤の奴にしてやられるにちがひないのだ」

「先生」

「俺は太閤に殺される位なら、今お前に殺される方が満足だ。良いか。やるのだぞ」

「先生、私をここで、お殺しなすつて下さいませ」

「うむ、お前が俺を殺さぬなら、俺は今にお前を殺してやる」

すると、小兵衛の顔は、月の中で俄に大膽不敵な相貌に變つて来た。彼は師の後姿を見詰めながら、その脊中に斬りつける機会を今か今かと狙ひ出した。と、

二人は寢静まつた伏見の町へいつの間にか這入つてゐた。

小兵衛は急に氣が抜けると、額の汗が口の中へ滲れて来た。瞬間、前を歩く五右衛門の後姿も、それと一緒にホッと吐息をついた。と、見る間に、再び、師はひらりひらりと體を左右にかはし出した。「そら、亂心だ」小兵衛は心を取り戻さうとしたときに、不意にひやりと寒けがした。すると、彼の片腕は胴を離れて路の上に落ちてゐた。

「やられた」と思つた彼は、一散に横へ飛び退くと、人形師の家の雨戸を蹴つて庭の中へ馳け込んだ。が、續いて飛鳥のやうに馳けて来た五右衛門の太刀風が、小兵衛の耳を斬りつけた。と、彼は庭に並んだ人形の群れの中で、風のやうに暴れてゐる五右衛門の姿をちらりと見た。

人形師、渦正徳衛門の表まで夜警が近づいて来たときには、五右衛門の姿は見えなかつた。

恐れをなして誰も近寄らぬ此の庭の中を、最初夜警が覗いたときは、ただ一見亂雑な人形の庭とより見えなかつた。が、その中に裾を跳ね上げた一人の女装の人形が倒れたままことごと動き出した。彼は松明を差し出すと、猥褻な顔をして、夜盗のやうにこつそり庭の中に這入つていつた。と、間もなく、彼は人形の片足を攫んだまま、悲鳴を上げて松明を投げ出した。下には、両手と手足を斬られた小兵衛の胴が、血に濡れたままごろりごろりと動いてゐた。

菊の香がしきりにどこからか匂つて来る。小兵衛は傍に倒れてゐる人形の顔を眺めながら、故郷の母の姿を思ひ浮べると瞑目した。

其時伏見街道を稻荷の方へ馳けて行く夜警の足の裏は、名月に照らされて、青い瓢箪のやうな馬鹿に滑稽な凄さがあつた。

ナ
ポ
レ
オ
ン
と
田
蟲

ナポレオン・ボナパルトの腹は、チユイレリーの觀臺の上で、折からの虹と對戰するかのやうに張り合つてゐた。その剛壯な腹の頂點では、コルシカ産の瑪瑙の釦が巴里の半景を歪ませながら、幽かに妃の指紋のために曇つてゐた。

ネー將軍はナポレオンの背後から、ルクサンブールの空にその先端を消してゐる虹の足を眺めてゐた。するとナポレオンは不意にネーの肩に手をかけた。

「お前はヨロッパを征服する奴は何者だと思ふ」

「それは陛下が一番よく御存知でございますう」

「いや、余よりもよく知つてゐる奴がゐさうに思ふ」

ナポレオンと田舎

「何者でございます」

ナポレオンは答の代りに、いきなりネーのバンドの留金がチヨツキの下から、きらきらと夕榮に輝く程強く彼の肩を揺すつて笑ひ出した。

ネーにはナポレオンの此の奇怪な哄笑の心理が分らなかつた。ただ彼に揺すられながら、恐るべき易ひから逃がれた蠻人のやうな、大きな哄笑を身近に感じただけである。

「陛下、いかがなさいました」

彼は語尾の言葉のままに口を開けて、暫くナポレオンの顔を眺めてゐた。ナポレオンの唇は、間もなくサン・クルウの白い街道の遠景の上で、皮肉な線を描き出した。ネーには、此のグロテスクな中に弱味を示したナポレオンの風貌は初めてであつた。

「陛下、そのヨーロッパを征服する奴は何者でございます」

「余だ、余だ」とナポレオンは片手を上げて冗談を示すと、階段の方へ歩き出した。

ネーは彼の後から、いつもと違つたナポレオンの狂つた青い肩の均衡を見詰めてゐた。

「ネー、今夜はモロッコの燕の巢をお前にやらう。ダントンがそれを食ひたさに、椅子から轉がり落ちたと云ふ代物だ」

二

その日のナポレオンの奇怪な哄笑に驚いたネー將軍の感覺は正當であつた。ナポレオンの腹の上では、徑五寸の田蟲が地圖のやうに猖獗を極めてゐた。此の事實を知つてゐたものは、眞淑無二な彼の前皇后ジョセフィヌただ一人であつた。

彼の肉體に此の植物の繁茂し始めた歴史の最初は、彼の雄圖を確證した伊太利征伐のロヂの戦の時である。彼の眼前で彼の率ゐた一兵卒が、彈丸に撃ち抜かれて轉倒した。彼はその銃を拾ひ上げると、先途を切つて敵陣の中へ突入した。彼に續いて一隊の兵卒は動き出した。それに續いて一大隊が、一聯隊が、さうして敵軍は崩れ出した。ナポレオンの燦然たる榮光はその時から初まつた。だが、彼の生涯を通じて、アングロサクソンのやうに彼を苦しめた田蟲もまた、同時にそのときの一兵卒の銃から肉體へ移つて來た。

ナポレオンの田蟲は頑癬の一種であつた。それは總ゆる皮膚病の中で、最も頑強な痒さを與へて輪廓的に擴がる性質をもつてゐた。搔けば花瓣を踏みにおつたやうな汁が出た。乾けば素焼のやうに素朴な白色を現した。だが、その表面に一度爪が當つたときは、此の濕疹性の白癬は、全圖を擡げて猛然と活動を開始した。

或る日、ナポレオンは侍醫を密かに呼ぶと、古い太鼓の皮のやうに光澤の消えた腹を出した。侍醫は彼の腹の傍へ、恭儉な禿頭を近寄せて呟いた。

「Trichophycia, Eczema, Marginatum.」

彼は頭を傾け變へるとボナパルトに云つた。

「閣下、これは東洋の墨をお用ひにならなければなりません」

此の時から、ナポレオンの腹の上には、東洋の墨が田蟲の輪廓に従つて、黒々と大きな地圖を描き出した。しかし、ナポレオンの田蟲は西班牙とはちがつてゐた。彼の爪が勃々たる雄圖をもつて、彼の腹を引つ掻き廻せば廻すほど、田蟲はますます横に分裂した。ナポレオンの腹の上で、東洋の墨はますますその版圖を擴張した。恰もそれは、ナポレオンの軍馬が、破竹のごとくオーストリアの領土を侵蝕して行く地圖の姿に相似してゐた。——此の時からナポレオンの奇怪な哄笑は深夜の部屋の中で人知れず始められた。

彼の田蟲の活動はナポレオンの全身を戰慄させた。その活動の最高頂は常に深夜に定つてゐた。彼の肉體が毛布の中で自身の温度のために膨脹する。彼の田蟲は分裂する。彼の爪は痒さに従つて活動する。すると、ますます活動するのは田蟲であつた。ナポレオンの爪は、彼の強烈な意志のままに、暴力を振つて對抗した。しかし、田蟲には意志がなかつた。ナポレオンの

爪に猛烈な征服慾があればあるほど、田蟲の戰鬥力は紫色を呈して強まつた。全世界を震撼させたナポレオンの一個の意志は、全力を擧げて、一枚の紙のごとき田蟲と共に拮闘した。しかし、最後にのた打ちながら屈服しなければならなかつたものは、ナポレオン・ボナパルトであつた。彼は高價な寢臺の彫刻に腹を當てて、打ちひしがれた獅子のやうに腹這ひながら、奇怪な哄笑を洩すのだ。

「余はナポレオン・ボナパルトだ。余は何者をも恐れぬぞ。余はナポレオン・ボナパルトだ。かうしてボナパルトの知られざる夜はいつも長く明けていつた。その翌日になると、彼の政務の執行力は、論理のままに異常な果斷を猛々しく現すのが常であつた。それは丁度、彼の猛烈な活力が昨夜の頑癪に復讐してゐるかのやうであつた。

さうして、彼は伊太利を征服し、西班牙を牽制し、エジプトへ突入し、オーストリアとデンマルクとスエーデンとを侵略してフランスの皇帝の位についた。

此の間、彼の此の異常な果斷のために戦死したフランスの壯丁は、百七十萬人を數へられた。國內には廢兵が充満した。禱りの聲が各戸の入口から聞えて來た。行人の喪章は到る所に見受けられた。しかし、ナポレオンは、まだ密かにロシアを遠征する機會を狙つてやめなかつた。此の蓋世不拔の一代の英氣は、またナポレオンの腹の田蟲をいつまでも癒す暇を與へなかつた。

つた。さうして彼の田蟲は彼の腹へ癪のやうにますます深刻に根を張つていつた。此の腹に田蟲を繁茂させながら、なほ且つヨーロッパの天地を攪亂させてゐるナポレオンの姿を見てゐると、それは丁度、彼の腹の上の奇怪な田蟲が、黙々としてヨーロッパの天地を攪亂してゐるかのやうであつた。

三

ナポレオンはジェーエープロの條約を締結してオーストリアから凱旋すると、彼の糟糠の妻ジョセフィヌを離婚した。さうして、彼はフランス皇帝の權威を完全に確立せんがため、新らしき皇妃、十八歳のマリヤ・ルイザを彼の敵國オーストリアから迎へた。彼女はハブスブルグ家、オーストリア神聖羅馬皇帝の娘である。彼女の部屋はチュレリーの宮殿の中で、ナポレオンの寢室の隣りに設けられた。しかし、新らしきナポレオン・ボナパルトは、また此の古い宮殿の寢室の中で、彼の尨大な田蟲の輪廓と格闘を続けなければならなかつた。

ナポレオンは若くして麗しいルイザを愛した。彼の前皇后ジョセフィヌはロベスピエールに殺されたボルネー伯の妻であつた。彼女はナポレオンより六歳の年上で先夫の子を二人までも持つてゐた。今、彼はルイザを見ると、その若々しい肉體はジョセフィヌに比べて、割られた

果實のやうに新鮮に感じられた。だが、そのとき彼自身の年齢は最早や四十一歳の坂にゐた。彼は自身の頑癪を持つた古々しい平民の肉體とルイザの若々しい十八の高貴なハブスブルグの肉體とを比べることは淋しかつた。彼は絶えず、前皇后ジョセフィヌが彼から壓迫を感じたと同様に、今彼はハブスブルグの娘、ルイザから壓迫されねばならなかつた。此のため、彼は彼女の肉體からの壓迫を押しつけ返すためにさへも、なほ自身の版圖をますますヨーロッパに擴げねばならなかつた。何ぜなら、コルシカの平民ナポレオンがオーストリアの皇女ハブスブルグのかくも若く美しき娘を持ち得たことは、彼がヨーロッパ三百萬の兵士を殺して勝ち得た彼の版圖の強大な力であつたから。彼はルイザを見たと同時に、油を注がれた火のやうにいよいよロシア侵略の壯圖を胸に描いた。殊に彼はルイザを皇后に決定する以前、彼の選定した女はロシアの皇帝の妹、アンナであつた。しかし、ロシアは彼の懇望を拒絶した。さうして、第二に選ばれたものは此のハブスブルグの娘ルイザである。ルイザにとつてロシアは良人の心を牽きつけた美しきアンナの住む國であつた。だが、ナポレオンにとつては、ロシアは彼の愛するルイザの微笑を見んがためばかりにさへも、征服せらるべき國であつた。左様に彼はルイザを愛し出した。彼が彼女を愛すれば愛するほど、彼の何よりも恐れ始めたことは、此の新らしい崇高優美なハブスブルグの娘に、彼の醜い腹の頑癪を見られることとなつて來た。もし出來得

ることであるならば、彼は此のとき、フランス皇帝ナポレオン・ボナパルトの壯嚴な肉體の價値のために、彼の伊太利と腹の田蟲とを交換したかも知れなかつた。かうして森嚴な傳統の娘ハプスブルグのルイザを妻としたコルシカ島の平民ナポレオンは、一度ヨーロッパ最高の君主となつて納まると、今迄彼の幸運を支へて來た彼自身の惠れた英氣は、俄然として虛榮心に變つて來た。此のときから、彼のさしもの天賦の幸運は揺れ始めた。それは丁度、彼の田蟲が彼を幸福の絶頂から引き摺り落すべき醜惡な平民の體臭を、彼の腹から嗅ぎつけたかのやうであつた。

四

千八百四年、パリーの春は深まつていつた。さうして、ロシアの大平原からは氷が溶けた。或る日、ナポレオンはその勃々たる傲慢な虚榮のままに、いよいよ國民にとつて最も苦痛なロシア遠征を決議せんとして諸將を宮殿に集合した。その夜、議事の進行するに連れて、思はずもナポレオンの無謀な意志に反對する諸將が續々と現れ出した。此のためナポレオンは、終に遠征の反對者將軍デクレスと數時間に渡つて激論を戦はさなければならなかつた。デクレスは、ナポレオンの征戰に次ぐ征戰のため、フランス國の財政の缺亡と人口の減少と、人民の怨

嗟と戰ひに對する國民の飽滿とを指摘してナポレオンに詰め寄つた。だが、ナポレオンはヨーロッパの平和克復の使命を楯にとつて應じなかつた。デクレスは最後に席を蹴つて立上ると、撫慰する傍のネー將軍に向つて云つた。

「陛下は氣が狂つた。陛下は全フランスを殺すであらう。萬事終つた。ネー將軍よ、さらばである」

ナポレオンはデクレスが歸ると、憤懣の色を表してひとり自分の寢室へ戻つて來た。だが、彼は此の大遠征の計畫の裏に、絶えず自分のルイザに對する弱い歡心が潜んでゐたのを考へた。殊にそのため部下の諸將と争はなければならなかつた此の夜の會議の終局を思ふと、彼は腹立たしい淋しさの中で次第にルイザが不快に重苦しくなつて來た。さうして、彼の胸底からは古いジョセフィヌの愛がちらちらと光りを上げた。彼は此の夜、そのまま皇妃ルイザにも逢はず、ひとり怒りながら眠りについた。

ナポレオンの寢室では、寒水石の寢臺が、ペルシヤの鹿を浮べた緋の緞帳に圍まれて彼の寢顔を捧げてゐた。夜は更けていつた。廣い宮殿の廻廊からは人影が消えてただ裸像の彫刻だけが默然と立つてゐた。すると、突然、ナポレオンの腹の上で、彼の太い十本の指が固まつた鍵のやうに動き出した。指は彼の寢卷を掻きむしつた。彼の腹は白痴のやうな田蟲を浮べて寢衣

の襟の中から現れた。彼の爪は再び迅速な速さで腹の頑癬を掻き始めた。頑癬からは白い脱皮がめくれて来た。さうして、暫くは森閑とした宮殿の中で、脱皮を掻きむしるナポレオンの爪音だけが咳くやうにぼりぼりと聞えてゐた。と、俄に彼の太い眉毛は、全身の苦痛を受け留めて慄へて来た。

「余はナポレオン・ボナパルトだ。余はナポレオン・ボナパルトだ。彼は足に纏はる絹の夜具を蹴りつけた。」

「余は、余は」

彼は張り切つた綱が切れたやうに、突如として笑ひ出した。だが、忽ち彼の笑聲が鎮まると、彼の腹は獸を入れた袋のやうに波打ち出した。彼はがばと跳ね返つた。彼の片手は緞帳の襞をひつ攫んだ。紅の襞は鋭い線を一握の拳の中に集めながら、一揺れ毎に環を鳴らして迸り出した。彼は枕を攫んで投げつけた。彼はピラミッドを浮べた寢臺の彫刻へ廣い額を擦りつけた。ナポレオンの汗はピラミッドの斜線の中へにぢみ込んだ。緞帳は揺れ続けた。と、彼は寢臺の上に跳ね起きた。すると、再び彼は笑ひ出した。

「余は、余は、何物をも恐れはせぬぞ。余はアルプスを征服した。余はプロシヤを撃ち破つた。余はオーストリアを蹂躪した」だが、云ひも終らぬ中に、ナポレオンの爪はまた練磨され

た機械のやうに腹の頑癬を掻き始めた。彼は寢臺から飛び降りると、床の上へべたりと腹を押しつけた。彼の寢衣の脊中に刺繍されたアフガニスタンの金の猛鳥は、彼を鋭い爪で押しつけてゐた。と、見る間に、ナポレオンの口の下で、大理石の輝きは彼の苦悶の息のために曇つて来た。彼は腹の下の床石が温まり始めると、新鮮な水を追ふ魚のやうに、また大理石の新らしい冷たさの上を這ひ廻つた。

丁度その時、鏡のやうな廻廊から、立像を映して近寄つて来るルイザの桃色の寢衣姿を彼は見た。

彼は起き上がることが出来なかつた。何ぜんら、彼はまた、ハプスブルグの娘、ルイザに腹の田蟲を見せたことがなかつたからルイザは呆然として、皇帝ナポレオン・ボナパルトが射られた獸のやうに床の上に倒れてゐる姿を眺めてゐた。

「陛下、いかがなさいました」

ボナパルトは自分の傍に蹲み込む妃の體温を身に感じた。

「ルイザ、お前は何にしに來た？」

「陛下のお部屋から、激しい呻きが聞えました」

ルイザはナポレオンの兩脇に手をかけて起さうとした。ナポレオンは周章でて擴つた寢衣の

襟をかき合せると起き上つた。

「陛下、いかなされたのでございます」

「余は恐ろしい夢を見た」

「マルメーゾンのジョセフイヌさまのお夢でございませう」

「いや、余はモローの奴が生き返つた夢を見た」

と、ナポレオンは云ひながら、執拗な痒さのためにまた全身を慄はせた。

「陛下、お寒いのでございますか」

「余は胸が痛むのだ」

「侍醫をお呼びいたしませうか」

「いや、余は暫くお前と一緒に眠れば良い」

ナポレオンはルイザの肩に手をかけた。ルイザはナポレオンの腕から戦慄を噛み殺した力強い痙攣を感じながら、二つの鎖のひきち切れた緞帳の方へ近寄つた。そこには常に良人の脱さなかつた胴巻が蹴られたやうに垂れ落ちて縮んでゐた。絹の敷布は寝臺の上から掻き落されて、開いた緞帳の口から濕つた枕と一緒にみ出でゐた。

ナポレオンは寝臺に腰を降ろすとルイザの福やかな腰に片手をかけた。だが、彼は今はハブ

スブルグの娘に自分の腹を隠し通した苦痛な時間が腹立たしくなつて来た。彼は腹部の醜い病態をルイザの眼前に晒したかつた。その高貴をもつて全ヨーロッパに鳴り響いたハブスブルグの女の頭上へ、彼は平民の病ひを堂々と押しつけてやりたい衝動を感じ出した。——余は一平民の息子である。余はフランスを征服した。余は伊太利を征服した。余は西班牙とプロシヤとオーストラリアを征服した。余はロシヤを蹂躪するであらう。余はイギリスと東洋を蹂躪する。見よ、ハブスブルグの娘——

ナポレオンはひき剥ぐやうに、寝衣の兩襟をかき擴げた。

ルイザの視線はナポレオンの腹部に落ちた。ナポレオンの腹は、猛鳥の爪の刺繍の中で、毛を落した犬のやうに汗を浮べて爛れてゐた。

「ルイザ、余と眠れ」

だが、ルイザはナポレオンの權威に壓迫されてゐたと同様に、彼の腹の、その刺繍のやうな毒毒しい頑癬からも壓迫された。オーストリアの皇女、ハブスブルグの娘は、今初めて平民の醜さを眼前に見たのである。

ナポレオンは彼女の傍へ身を近づけた。ルイザは緞帳の裾を踏みながら、恐怖の眉を蹙めて反り返つた。今はナポレオンは妻の表情から敵を感じた。彼は彼女の手首をとつて引き寄せた。

ナポレオンは妃の腕を攫んだ。彼は黙つて懲罰の方へ引き返さうとした。

「陛下、お赦しなされませ、御無理をなされますと、私はウイーンへ歸ります」

磨かれた大理石の三面鏡に包まれた光の中で、ナポレオンとルイザとは明暗を閃めかせつつ、分裂し粘着した。争ふ色彩の尖影が、屈折しながら鏡面で衝激した。

「陛下、お氣が狂はせられたのでございます。陛下。お放しなされませ」

しかし、ナポレオンの腕は彼女の首に絡まりついた。彼女の髪は金色の渦を巻いてきらきらと慄へてゐた。ナポレオンの惨忍性は、ルイザが藻掻けば藻掻くほど怒りと共に昂進した。彼は片手に彼女の頭髪を繩のやうに巻きつけた。

逃げよ。余はコルシカの平民の息子である。余はフランスの貴族を滅ぼした。余は全世界の貴族を滅ぼすであらう。逃げよ。ハブスブルグの女。余は高貴と若さを誇る汝の肉體に、平民の病ひを植ゑつけてやるであらう。

ルイザはナポレオンに引き摺られてよろめいた。二人の争ひは、トルコの香料の匂ひを馥郁と撒き散らしながら、寢臺の方へ近かづいて行つた。緞帳が閉められた。ペルシヤの鹿の模様は暫く緞帳の襞の上で、中から突き上げられる度毎に脹れ上つて揺れてゐた。

「陛下、お氣をお洗めなさりませ。私はジョセフイヌさまへお告げ申すのでございませう」

緞帳の間から逞しい一本の手が延びると、床の上にはみ出てゐた枕を中へ引き摺り込んだ。

「寄れ、ルイザ」

「陛下、侍醫をお呼びいたしませう。暫くお待ちなされませ」

「寄れ」

彼女は緞帳の襞に顔を突き當て、翻るやうに身を躍らせて、廣間の方へ馳け出した。ナポレオンは明らかに貴族の娘の侮辱を見た。彼は彼の何者よりも高き自尊心を打ち碎かれた。彼は突つ立ち上ると、大理石の鏡面を片影のやうに這つて行くハブスブルグの娘の後姿を睨んでゐた。

「ルイザ」と彼は叫んだ。

彼女の青ざめた顔が裸像の彫刻の間から振り返つた。ナポレオンの炯々とした眼は緞帳の奥から輝いてゐた。すると、最早や彼女の足は慄へたまま動けなかつた。ナポレオンは寢衣の襟を擴げたままルイザの方へ進んでいつた。彼女はまたナポレオンの腹を見た。静まり返つた夜の宮殿の一隅から、薄紅の地圖のやうな怪物が口を開けて黙々と進んで來た。

「陛下、お待ちなされませ、陛下」

彼女は空虚の空間を押しつけるやうに両手を上げた。

「陛下、暫くでございませう。侍醫をお呼びいたしませう」

「陛下、今宵は静にお休みなされませ。陛下はお狂ひなされたのでございます」
 ペルシャの鹿の模様は静まつた。彫刻の裸像はひとり圓柱の傍で光つた床の上の自身の姿を見詰めてゐた。すると、突然、緋の緞帳の裾から、桃色のルイザが、吹きつけられた花のやうに轉がり出した。裳裾が空宙で花散いた。緞帳は静まつた。ルイザは引き裂かれた寝衣の切れ口から露はな肩を出して倒れてゐた。彼女は暫く床の上から起き上らうとしなかつた。掻き亂された彼女の金髪は、波打つたまま大理石の床の上へ投げ出された。
 彼女は漸く起き上ると、青ざめた頬を涙で濡らしながら歩き出した。彼女の長い裳裾は、彼女の苦痛な足跡を示しつつ緞帳の下から憂鬱に繰り出されて曳かれていつた。
 ナポレオンの部屋の重々しい緞帳は、そのまま濕つた旗のやうに明方まで動かかなかつた。

五

その翌日、ナポレオンは何者の反對をも切り抜けて露西亞遠征の決行を發表した。此の現象は、丁度彼がその前夜、彼自身の平民の腹の田蟲をハブスブルグの娘に見せた失敗を、再び一時も早く取り返さうとしてゐるかのやうに敏活であつた。殊に彼はルイザを嫁つてから、彼に皇帝の重きを與へた彼の最も得意とする外征の手腕を、まだ一度も彼女に見せた丈がなかつた。

ナポレオン・ポナバルトの此の大遠征の規模策戦の雄大さは、彼の全生涯を通じて最も壯麗華麗を極めてゐた。彼は國內の三十萬の青年に動員令に對する準備を命じた。更に健全な國內の壯丁九十萬人を國境と沿海戰の守備に充てた。なほその上に、彼はフランス本國から二十萬人を、ライン同盟國から十四萬七千人、伊太利から八萬人を、波蘭とプロシヤとオーストリアから十一萬人、これに佛領各地から出さしめた軍隊を合せて七十萬人に、加ふるに豫備隊を合して總數百十萬餘人の軍勢をドレスデンへ集中させた。さうして、ナポレオンは、彼の娘のごとき皇后ルイザを連れてパリからドレスデンまで出て行つた。ドレスデンではルイザの父オーストリア皇帝、プロシヤ皇帝、同盟各國の最高君主が一團となつて、百十萬餘人の軍隊と共に彼ら二人の到着を出迎へた。
 此の古今未曾有の壯麗な大歓迎は、それは丁度、コルシカの平民ナポレオン・ポナバルトの腹の田蟲を見た一少女、ハブスブルグの娘、ルイザのその兩眼を眩惑せしめんとしてゐる必死の戯れのやうであつた。
 かうして、ナポレオンは彼の大軍を、いよいよフリードランドの大原野の中へ進軍させた。

六

ナポレオンの腹の上では、今や田蟲の版圖は徑六寸を越して擴つてゐた。その圭角をなくした圓やかな地圖の輪廓は、長閑な雲のやうに美妙な線を張つて歪んでゐた。侵略された内部の皮膚は乾燥した白い細粉を全面に漲らせ、荒された茫茫たる砂漠のやうな色の中で、僅かに貧しい細毛が所どころ昔の激烈な争ひを物語りながら枯れかかつて生えてゐた。だが、その版圖の前線一圓に渡つては數千萬の田蟲の列が、紫色の塹壕を築いてゐた。塹壕の中には膿を浮べた分泌物が溜つてゐた。そこで田蟲の群團は、鞭毛を振りながら、雜然と縦横に重なり合ひ、各々横に分裂しつゝ二倍の群團となつて、脂の漲つた細毛の森林の中を食ひ破つていつた。フリードランドの平原では、朝日が昇ると、ナポレオンの主力の大軍がニエメン河を横断してロシアの陣營へ向つていつた。しかし、今や彼らは連戦連勝の榮光の頂點で、盡く彼らの過去に殺戮した血色のために氣が狂つてゐた。

ナポレオンは河岸の丘の上からそれらの軍兵を眺めてゐた。騎兵と歩兵と砲兵と服色燦爛たる數十萬の狂人の大軍が林の中から、三色の雲となつて層々と進軍した。砲車の轍の連續は響を立てた河原のやうであつた。朝日に輝いた劍銃の波頭は空中に虹を撒いた。栗毛の馬の平原は狂人を載せてうねりながら、黒い地平線を造つて、潮のやうに没落へと溢れていつた。

セ
レ
ナ
ー
ド

R 博士の歸朝祝賀會だ。明け放された喫煙室のドアからは煙が濛々と流れてゐた。氷柱の
 薔薇は湯氣を立て、空氣の中に現れ出した。梶はシガーを捨て、雑談の咲き誇つた會場を見廻
 した。花束の環の中で動めく群集は濁つてゐた。大傘燈の光りを浴びて白金とダイヤのきらめ
 きが。モールは花火のやうに垂れ下り、手に手に扇はひらひらと動いてゐた。
 梶は人々の間を抜けて露臺の石の冷たい欄干に肘をついた。舞踏室からは折から「キヤラバ
 ン」の憂愁がフォックス・ Trot の顫律で流れて來た。
 「こゝにゐらつしやいましたのね」
 町子の聲だ。梶は背後を向いた。

「昨日は失禮しました」

「何アに？」と町子は訊き返した。

「何だか失禮なことをしたやうに思ふのですが」

「まアいやな方」

「いや確に」

「でも昨日はお會ひしませんでしたわ」

「所が僕はあなたの夢を見たのです」

「どんな夢？」

「甚だ失禮な夢でして」

「仰言いよ」

「あなたにとつては憂鬱そのもののやうな夢なんです」

「いやアね」

「だから失禮なことをしたやうで」

突然二人は白々しい此の相變らずの芝居氣に笑ひ出した、二人は許嫁の中だつた。
「まア、御覺なさいました」

町子の指差す欄干の下では、羊齒の茂みの鉢の中に一つの鳥籠が置かれてあつた。籠の中には二羽の小鳥が首を擦り寄せて止木の上で眠つてゐた。

「寒いのかしら。慄へてゐるわ」

「それが何の暗示です」

「可愛いわね」

「センチメンタルだ」

「いやよ。そんなこと云ふものぢやなくつてよ」

「幸福さうですね。此の小鳥は」

「ほんとうにね」

「お氣に召しましたか」

「え、可愛いわ。ほんとに幸福さうだわ。私、かう云ふのを見てみると氣持が晴々するの。

幸福さうなものつて、いつ見てもいゝものね。私、小鳥を飼はうかしら」

「犬をお飼ひなさい。それから、猿もついでに一匹と」

「そんなことをしちや喧嘩ばかり見てゐなきやならないわ」

「いや、さうするといいですよ。喧嘩ばかり見てゐると云ふことが非常に下品

「ぢや猿でなくつたつていゝわけですね。僕の鼻を引つ搔くなら猿よりあなたに引つ搔かれる方がいゝですね」と梶はいつた。

「いやよ、私が引つ搔いたら、一生私が怨まれるわ。猿だといゝわ」と町子はいつた。

「常識がないからね」

「えゝ」

「罪が猿にあつて、猿め、痴呆症で犯罪行爲にならないとすると、何だか話が馬鹿々々しくなつて來ましたね。所で、あなたはあんまり美しすぎる」

「お賞めになつても、もう信用しないからいゝわ」

「いや、あんまり美しすぎると云ふことは、いけないことなんです。賞めちやゝあません」

「ぢや信用するわ」

「いや、まア待つてくれ給へ。あんまり美しいといふことを信用されると、僕が困るんですよ」

「どうしてお困りになるの？」

「これはしたりあなたは未だ知らなかつたんですか？」

な下らないことこのやうに見えて來るんですよ。あんまり幸福さうなものばかりを見てゐられるとそれと反對に現在が非常につまらなく見えて來る。あなたに現在がつまらなく見えて來られると、第一損をするのは此の僕なんですからね。して見ると、此の小鳥の奴め、此奴は敵だ」

「あら」

「いや何に、これは一寸喜はしき諷刺そのまゝでね。これに似たやうなことをシエクスピヤがよくやりました」

「ぢや私、猿も飼ひませうか」

「いや冗談だといつてるぢやありませんか」

「私、猿にあなたの鼻をひつ搔かしてやりたいのよ。一度でいゝわ」

「これは驚いた」

「あなたがあまり美しいと、私いやなの」

「さう。それはありがたい。つまり心配になると云ふんでせう」

「えゝ、心配だわ。うるさいわ」

「それで猿に僕の鼻を？」

「たつた一度でいゝのよ。二度も引つ搔かすと私あなたを見るのがいやになるわ」

「私、自分をもつと美しくなりたいと思つてゐるの」
 「さうさう、それが不幸の原因だと云ふのです。つまりこれは一例に過ぎないんですがね。僕は不幸なことを聞いたんですよ。ある不良青年の告白によると、自分を美しいと已惚れてゐる女性を誘惑するのは易々たることだといふのです。これは平々凡々たる眞理です。だが、それだけ一般的で的確で、殊にあなたの胸にはびんと響いて来るにちがひないと思ふのですが、いかゞですか？」

「そりやさうね」

「いけませんね。そりやさうね。か。成る程、誘惑されると云ふことは女にとつては喜ばしき事なんだ。そして、さう云ふ女性の良人となるべき男子は、ひとり猿に鼻を引つ搔かれて喜んでゐなけりやならないと云ふことは、こりや人間の原則として」

「まア鳥が慄へてゐますよ」

「僕だつて慄へてゐますよ」

「ぢや、あなたも私をもつと、汚くなるといふと思つてらつしやるの？」

「仰の通り」

「いやよ、そんなこと、これ以上汚くなれば、私」

「だつて、あなたは猿に僕の鼻を引つ搔かせるつて仰言つたぢやありませんか。猿に引つ搔かれて、より美しくなつたといふ男の話は聞いたことがありますね」

「私だけが美しくなつて、そしてあなただけが汚くなるといふと思ふの」

「エゴイスト」

「だつて、誰だつてさうだわ」

「だから、それが人間の原則とすると」

「あなただつてさうだわ」

「だから、それが人間の原則とすると」

「エゴイスト」

「それは君だ」

「あなたよ」

「憂ふべき現象だね」

「私、綺麗になるの」

「僕もなる」

「男の方は綺麗にならなくてもいいわ」

「妻だけが綺麗になつて、妻だけが誘惑されて、妻だけが原則に従つて放蕩して。僕は女の良人となることだけは永久にやめだ」

「あら」

「僕は君のやうな女をひとつ喜ばすために誘惑してお眼にかけやう」

「いやよ。そんなこと、いやよ」

「いや、まア我慢してゐたまへ」

「いや、いや。私、怒つてよ」

「さて、誘惑の第一歩だ。君、こゝは人眼にかゝつて五月蠅だからね。あの庭へ行かうぢやありませんか。あそこでひとつ、何、かまふもんか、まアあなたは、何んて今夜は美しいんだらう。あなたのその髪は、丁度」

梶は町子の手を持つた。

三

梶と町子は廣間を抜けて、ペランダから、庭園の方へ降りて行つた。棕櫚の樹の間の瓦斯燈の光りに半身を青白く染めながら、泉水の銅の女神の口から噴水が、泉石は濡れて黙つて光つ

てゐた。池を中心に放散形に擲がつた芝生の外には花園が静まつてゐた。二人は人目を憚る必要はなかつた。たとへ人々が傍にゐやうとも、二人はどちらの両親からも許されてゐたのではない。今はたゞ二人は二人自身の幸福に責任を持つてばよいのであつた。幸か不幸か。それは二人の勝手であつた。しかし、いかなる時と雖も、戀するものは人目を厭ふものである。花園を欲するものである。さうして、二人は遺憾なく花園へ來た。人目は遠く高樓の窓邊にあつて、夜である。争ふべき時ではない。しかし、町子は少し見たところ不機嫌な様子であつた。

「ね、あなたは結婚の日がいつ頃になればいゝと思ひます？」と梶は訊いた。

「私、知らないわ」

「何か、あなたは怒つてるんぢやありませんか」

「知らない」

梶は黙つて了つた。町子の不機嫌の原因がどこにあるのかと考へた。が、分らなかつた。すると、彼も不機嫌になりだした。

町子は梶が不機嫌になつたと云ふことを嗅ぎつけると、自分の不機嫌から癒してかゝらなければ、と考へた。

「ね、あなた、ほんとうに結婚するのがお厭なの？」と町子は云つた。

「僕が？ どうして」
 「だって、あなたがさつきさう仰言つたわ」
 「僕か？」
 「ええ」
 「何と？」
 「もう永久に結婚しないつて」
 「ははア、成る程、それであなたは怒つたんですか」
 「そして女の方を誘惑するつて、さう仰言つたわ」
 「だから誘惑したちやありませんか」
 町子は黙つて了つた。暫らくは何のことだか分らなかつた。
 「馬鹿ですね。こんな静な人目のない所へ令嬢をひっぱり出すなんて、なか／＼上手く誘惑したもんだ。いかゞです」
 「まア、いやだ」と町子はいつた。
 「何がいやなことがあるものか」
 「いやよ」

「己惚れの強い令嬢を誘惑するのは、車を引つ張るより一寸楽な仕事だね。まアあなたは何んて美しいんだらう、つて、それでがらく／＼と従いて来る」
 「私、もうあちらへ歸つてよ」
 町子は拗ながら急に遠くの明るい窓の方へ歩き出した。梶はその手を持つて引きとめた。
 「いや、今歸へられては臺なしだ」
 「いやよ」
 「まア待つてくれ給へ。切角、／＼まで漕ぎつけたのに。ね、町子さん。一寸、あの花を見て御覽」
 町子は黙つて肩を振つてゐた。
 「もう少し歩かうぢやありませんか」
 「私歸へりたいの」
 「いゝから従いて來たまへ。今に、誘惑されて良かったと思ふやうな所へ連れてつて上げますよ。同じ誘惑したからは、僕だつてうんと幸福な目に乗らないとね。君に濟まない」
 梶は町子を引つ張つて花園の中を奥深くへ這入つていつた。其花園の中には香氣をたてて花々が。チューリップ、金鶏草、百合と薔薇と夏菊と。咲き亂れた彼方には二頭の馬車が靜に停

つてみた。

四

梶は町子の手を曳いてゐる中に、ふと活動寫眞の幸福な場面を思出たひし。

「空は屋根の彼方にあり

かくも青く

かくも静に」

と梶は云つた。

「それは何なの？」

「ベルレーヌの詩ですよ。一つ躍りませうか。ダブルカドリール」

「いやよ。人に見られちやいやだわ」と町子は云つた。

「ところが、僕はどうも今夜は嬉しいんですよ」

「どうなすつたの」

「いや、理由は甚だ簡単です」

と梶は云ふと、いきなり片膝をついて跪拜き、町子の手を自分の唇に押しあてがつた。

「ああ、あなたのその黒髪は、カルメンの如く、乳房は麥の中に草食ふ山羊の如し。ああ、あなたのその臍は、工人の手にて造りたる圓き盃の如く」

「いやよ、人が見てゐるわ」

「見てたつてかまふもんか」

「いや」

「ああ、あなたのその股はソロモンの象牙の柱の如く」

「行きませうよ」

「ああ痛。膝の下に石があつた」

町子は口を壓へて笑ひ出した。梶は膝を撫でながら立ち上ると町子の腕を脇の下にかい込んだ。

「どうです。ひとつ、此の花畑の中へ飛び込みませうか」

「そんなことしちや叱られてよ」

「見てやしないさ」

「だつていけないわ」

「此の花畑の中へ飛び込む勇氣が出たら、二人は幸福なんだがなア」

「そんなことにかゝわりがないわ、飛び込まなくつたつて幸福よ」
 「もし、飛び込んだが最後、此の花畑が監獄のやうに恐くなるんだがね。面白い」
 梶は足を擴げると花畑をめがけて飛び込む姿勢になり出した。

「いや、いや」

町子は梶の片手を持つて引きとめやうとした。

「いち、にい」と梶はかけ聲をかけた。

「いやよ、いやよ」

「いち、にい」

「いやだつてば」

「さあア」と云ふと、梶はくるりと向き返つて町子の首を抱きかゝへた。

「氣狂ひね」

「氣狂ひだ。お嫌ひですか」

「あなたのやうな弱虫に飛び込めるものですか」

「よしッ」と梶は云ふと、再び花畑の中を見詰め出した。

「いやよ、いやよ」

「わが愛するものに弱虫と云はれたからは、御覽じろ」

「嘘よ嘘よ。強いわ」

「云ひわけは相ならぬ」

「さア、行きませうつて」

「一寸、恐わくなつたぞ！」

「それ御覽なさい」

「どうして、この花の中へ飛び込めないのかね。どうも不思議だ」

「そんな欲望を起すからいけないんだわ」

「いや、われわれに飛び込まれたら、飛び込まれたものゝ方が幸福なんだがね。花よ、花よ」

「おつちよこちよいね」

「何んと？」

「おつちよこちよいだわ」

「それなら嚴肅な行動をとりますかね。言葉も云ひませんよ」

「いやだ」

「とにかく、おつちよこちよいになつてゐるときに、おつちよこちよいだなんて云ふものぢや